

寺の谷3号墳発掘調査報告書

静岡県 小笠郡
小笠町教育委員会

序 文

去る昭和47年末に町道工事に係って、寺の谷3号墳の発掘調査を実施する必要が出現しました。総責任者に静岡大学名誉教授内藤晃先生をお迎えして調査を実施致しました。調査後、報告書作成に関して静岡大学教授市原壽文先生のご指導と、故鈴木忠雄氏の絶大なるご協力によりその作業を完了することができました。

その結果、弥生時代の遺構・遺物と古墳についての貴重な資料を数多く発掘することができました。

吾が郷土の先人たちが、その時代時代にどんな生活をし、また、どんな文化を営んだのかを、その資料を手がかりとすることによって知ることができ、さらに古代のロマンへと無限に思いを広げることができます。

今、全く異なる文明時代に生きる吾々は、この貴重な、郷土の先人たちが残してくれた文化を大切に継承し、後世の人々に伝える責務が有るものと考え、この冊子を作成致しました。

多くの人々に末永く読み継がれますことを祈念しますと共に、多方面にわたってご協力下さいました多くの方々に、厚く御礼申し上げまして序文と致します。

平成3年3月30日

小笠町教育委員会 教育長 牧 野 毅

例 言

1. 本書は、小笠郡小笠町川上下組に位置した寺の谷3号墳の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は1972(昭和47)年9月30日～10月11日の12日間、小笠町教育委員会が主体となって実施された。発掘調査に伴う事務は小笠町教育長・松山昌宏及び松下保が担当した。
3. 発掘調査担当者には、静岡大学教授(現名誉教授)・内藤晃が当たった。発掘調査には下記の者が参加した。

調 査 員 : 市原壽文・藤田等(静岡大学人文学部教官)、栗田有城

調査補助員 : 大槻伸・鈴木幸子・遠藤才文・中川眞文・宇佐美武嗣・長屋(旧姓長峰)裕子・斉藤(旧姓須藤)美紀子・小俣洋一郎・岡田洋・山村冨子・大西健一・中沢正俊・岩波(旧姓見上)洋子・中島延佳(以上静岡大学人文学部学生)・有国尚(静岡大学農学部学生)。
4. 発掘調査によって出土した資料の整理・埴輪の硬化処理・復元などの諸作業及び資料の実測・採拓・撮影などの諸作業は1986～7(昭和61～2)年に静岡大学人文学部考古学研究室において実施した。
5. 上記の資料整理作業は、静岡大学教授・市原壽文を中心として進め、下記の者が参加した。

横田宏・池ヶ谷靖・千葉(旧姓伊吹)香・川崎正幸・小橋康之・望月千裕(以上静岡大学人文学部人文学科日本史学・考古学専攻学生)・酒井伸枝(同西洋史学専攻学生)・眞口佳子(同社会学科学生)。
6. 報告書の原稿執筆・編集には市原壽文が当たった。
7. 報告書作成に伴う事務は、小笠町前教育長・赤堀英夫及び曾根敏、現教育長・牧野毅及び黒田潔が当たった。
8. 本報告書の上梓に伴って、本古墳の出土遺物はすべて小笠町教育委員会に返却され、保管された。

寺の谷3号墳発掘調査報告書

目 次

序 文	
例 言	
1. 寺の谷3号墳の立地環境	1
2. 寺の谷3号墳発掘調査の経過	4
(1) 発掘調査の発端	4
(2) 発掘調査	5
3. 寺の谷3号墳の発掘調査	7
(1) 寺の谷3号墳の墳形	7
(2) 封土と周溝の調査	8
(3) 内部主体の発掘調査	14
(4) 弥生時代のV字溝	16
4. 寺の谷3号墳の出土遺物	19
(1) 内部主体の出土遺物	19
(2) 出土の埴輪について	19
◦ 円筒埴輪	19
◦ 朝顔形円筒埴輪	21
◦ 象形埴輪・器財埴輪	29
(3) 出土の須恵器について	30
(4) 出土の弥生土器について	34
5. 寺の谷3号墳の諸問題	35

挿 図 目 次

第1図	寺の谷古墳群位置及び周辺地形図(国土地理院・1/25,000下平川使用) ……	3
第2図	寺の谷3号墳墳形測量図・発掘区画位置図 ……	6
第3図	1・2・3・4・5・6・8トレンチ断面実測図 ……	11
第4図	墳頂部A-B, C-D断面実測図及び土層凡例 ……	13
第5図	内部主体実測図 ……	16
第6図	内部主体下部V字溝実測図 ……	17
第7図	埴輪実測図1(円筒埴輪) ……	22
第8図	埴輪実測図2(円筒埴輪) ……	23
第9図	埴輪実測図3(円筒埴輪破片) ……	24
第10図	埴輪実測図4(円筒埴輪破片) ……	25
第11図	埴輪実測図5(円筒埴輪破片) ……	26
第12図	埴輪実測図6(円筒埴輪残欠) ……	27
第13図	埴輪実測図7(円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪破片)及び須恵器破片実測図 ……	28
第14図	埴輪実測図8(象形埴輪残欠) ……	31
第15図	埴輪実測図9(象形埴輪残欠) ……	32
第16図	埴輪実測図10(象形埴輪残欠102~104・108・109)及び須恵質円筒埴輪破片 (98~101)実測図・内部主体出土刀子(126)・直刀残欠(127) 実測図 ……	33
第17図	内部主体下部V字溝出土土器(125) 実測図 ……	34

図 版 目 次

第1図版

- a 東側から墳丘を望む
- b 西側から墳丘を望む
- c 南側からの墳丘近景

第2図版

- a 内部主体内での刀子出土状況
- b 内部主体全景(東側より)
- c 内部主体東端の状況

第3図版

- a 内部主体下のV字溝全景
- b 内部主体下V字溝での弥生土器出土状況
- c 内部主体下V字溝出土の弥生土器

第4図版

- a 周溝と埴輪破片出土状況
(6トレンチ北西側、南東より)
- b 周溝内の埴輪破片出土状況
(4トレンチ北東側、南東より)
- c 周溝と埴輪破片出土状況
(2トレンチ北西側、南東より)

第5図版

- a 周溝内の埴輪破片出土状況
- b 周溝内の埴輪破片出土状況
- c 周溝内の埴輪破片出土状況

第6図版

- a 円筒埴輪口縁部破片
- b 円筒埴輪口縁部及び胴部破片

第7図版

- a 円筒埴輪
- b 円筒埴輪口縁部(2)及び
胴部(7)残欠
- c 円筒埴輪胴部残欠

第8図版

- a 円筒埴輪胴部残欠
- b 円筒埴輪口縁部破片

第9図版

- a 円筒埴輪破片
- b 円筒埴輪破片

第10図版

- a 円筒埴輪破片
- b 円筒埴輪破片

第11図版

- a 円筒埴輪破片
- b 円筒埴輪破片

第12図版

- a 円筒埴輪底部破片
- b 朝顔形円筒埴輪(90~94)及び
須恵質円筒埴輪(98~101)破片

第13図版

- a 円筒埴輪胴部残欠
- b 円筒埴輪底部残欠
- c 円筒埴輪底部残欠

第14図版

- a 象形埴輪残欠(a面)
- b 象形埴輪残欠(b面)

第15図版

- a 象形埴輪残欠(a面)
- b 象形埴輪残欠(108・109b面)

第16図版

- a 内部主体出土刀子(126)及び直刀残欠
(127)、象形埴輪残欠(102~107)、須恵
器破片(95~97)
- b 象形埴輪残欠

1. 寺の谷3号墳の立地環境

寺の谷3号墳の位置する小笠町は、大井川の左岸、掛川市の最東域と榛原郡金谷町との境界間近に位置する粟ヶ岳に起源する菊川の下流域左岸に展開している。菊川の流路は小笠町の西に接する大東町との境を流れて南接する浜岡町千浜を経て、遠州灘に達している。東接する相良町側からは、県下屈指の茶産地である牧の原台地の尾根が及んでいる。

静岡県教育委員会発行(昭和63年)の『静岡県文化財地名表Ⅰ—静岡市以西—』および『静岡県文化財地図Ⅰ—静岡市以西—』には、先土器時代～歴史時代にかけての73遺跡が記載されている。その中には24個所の横穴群が含まれているのであるから、横穴古墳の1基1基を数えていけば、200を越える数の古墳を含む遺跡が町域内に分布していることになる。その遺跡の中には、先土器時代・1、縄文時代・3、弥生時代・11、高塚古墳・11、高塚古墳群・2、横穴古墳群・24が数えられ、横穴古墳が卓越する存在を示している。

これらの遺跡の中には、次にあげるような遺跡もみられる。

弥生時代の遺跡としては嶺田遺跡(静岡県文化財地名表遺跡番号—以下、遺跡番号と略記—小笠町55)をあげることができる。本遺跡出土の弥生中期中葉の土器は、嶺田式土器と呼ばれて中遠地域を中心とする一帯に分布し、本遺跡がその標準遺跡である。

寺の谷古墳群が立地する同じ台地上の北東約400メートル弱の地点には、全長47メートルの前方後円墳である舟久保(船窪)古墳(遺跡番号—小笠町38)が位置している。舟久保古墳は、菊川流域で数少ない古式の墳形のみられる古墳として注目される。

別の前方後円墳である上平川大塚古墳(遺跡番号—小笠町15)は古くから有名である。残念なことに、大正9～10年に壁土とするために除土され、現在は墳丘の一部のみみられるにとどまる。本来、後円部の径約8～9間(26.4～29.7メートル)と判断されているが、墳丘の原形規模は更に大きかったのではないと思われる。除土作業の進行過程に、後円部地表から約二尺(60数センチメートル)の深度で、三角縁天王日月獣文帯四神四獣鏡をはじめ他に鏡2面、勾玉・3、管玉・6、小玉若干、刀身残欠が採集されたことが記載されている。

本古墳が沖積平野に位置することからみれば、中期古墳的な立地条件を占めていると言いうことができる。そして、鏡鑑三面を含む副葬品を出土するような前方後円墳は、菊川流域では他に発見されていない。

小笠町の古墳としてもっとも普遍的にみられるのは、24群、155基に及ぶ、横穴墳である。榛原郡・小笠郡・袋井市・掛川市・周智郡南域にかけての一帯が、県西部における横

穴群の密集地帯であり、小笠町がその一角を占めているのがわかる。古墳時代後期の古代家族の墓とされており、群在するのが普通である。

以上が、小笠町内に分布する弥生時代～古墳時代にかけての遺跡・古墳のなかで、具体的に理解することができる情報の得られている遺跡・古墳である。他に、先土器時代の石器が採集されている川上原遺跡と、縄文時代の土器・石器を出土する遺跡3箇所も確認されている。これらの遺跡・古墳等は、小笠町における原始～古代の歴史の推移を教えてくれる一つ一つの資料であり、本報告書の寺の谷3号墳も古墳時代資料の一つである。

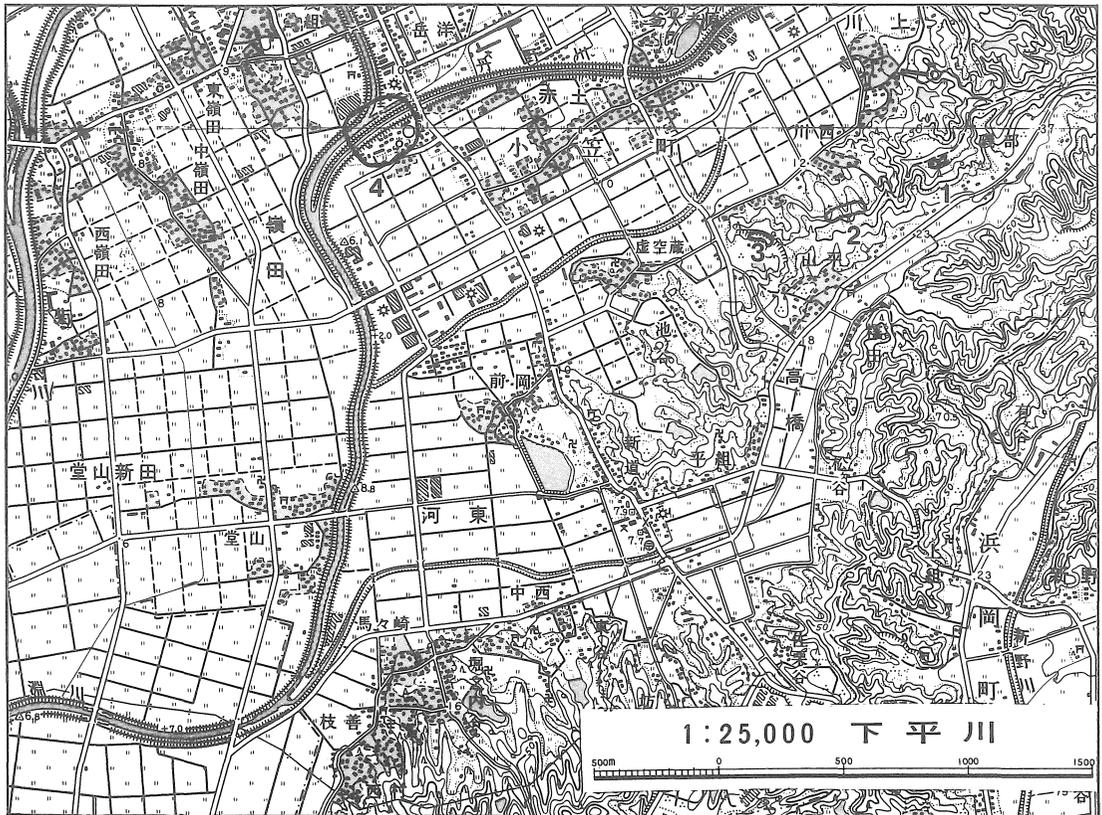
寺の谷3号墳は、町域東側の約三分の一程の範囲に牧ノ原台地西縁から数条の尾根がのびているが、その一つの尾根に立地する。その尾根＝台地の南側は高橋川に、北側は古谷川・丹野川によって開析されている。高橋川・丹野川は、牛淵川を経て菊川の下流に合流する。

台地の幅は約500メートル、全長約3.5キロメートルに及び、主軸の方向は北東～南西方向に走っている。台地の縁辺は小規模な谷地形に浸食され、複雑な裾線を描いているが、その現象は北側に激しくて櫛歯状の凹凸がみられる。そのために、台地頂面はそれ程広いとはいえないのであるが、北側の丹野川流域の沖積面からの比高約40メートル弱、南側の高橋川流域の沖積面からの比高は約30メートルである。

同じ台地上の高橋舟久保には、前方後円墳の舟久保古墳が位置することはすでに述べた。また、寺の谷古墳群の南西西約300メートルの川上下組の台地斜面には、19基の横穴墳によって構成された「寺の谷横穴群」（遺跡番号—小笠町58）が位置する。台地を西南の先端部に向って、寺の谷古墳群の南西西約600メートルで五丁池横穴群（遺跡番号—小笠町62）、その南西約200メートルに、三ツ池古墳群（遺跡番号—小笠町63）と池ヶ谷横穴群（遺跡番号—小笠町64）が相接して位置する。台地西南端の北寄りには高根山横穴群（遺跡番号—小笠町66）が、南寄りには平組横穴群（遺跡番号—小笠町69）が位置している。

そして、寺の谷古墳群は台地頂面の南寄り、地形図では海拔標高50メートルの等高線に囲まれた地点に位置し、3基の古墳が群を構成していたが、道路の整備工事や開墾によって煙滅し、現在は1号墳（遺跡番号—小笠町44）1基が残存するにとどまる。寺の谷1号墳は、本来寺の谷古墳群の東端に位置した古墳であり、3号墳はその西側道路沿いに位置していた。2号墳は、3号墳の西北に位置しており、何れも高さ2～3メートルの墳丘がみられた。

本古墳群に寺の谷という地名を冠しているのは、丹野川左岸の沖積面から台地にノッチ状に入り込んだ小規模な谷地形が寺の谷と呼ばれ、その谷頭が古墳群の西北に接している



第1図 寺の谷古墳群位置及び周辺地形図(国土地理院・1/25,000下平川使用)

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 舟久保古墳 | 3. 寺谷横穴群 |
| 2. 寺の谷古墳群 | 4. 嶺田遺跡 |

ことから寺の谷古墳群と呼ばれたゆえんである。本古墳群は、川上下組に位置している。

以上が、寺の谷古墳群をとりまく、自然・歴史環境の概観である。

2. 寺の谷3号墳発掘調査の経過

(1) 発掘調査の発端

寺の谷3号墳の封土の一部が道路の整備工事によって除土されはじめたことに注目したのは、郷土史家として小笠町郷土研究会会長、町文化財保護審議委員会委員などを勤めた鈴木忠雄氏であった。鈴木氏は、寺の谷古墳群の立地する台地北麓の川上に住んでおられたこともあって、周辺一帯の埋蔵文化財について絶えず目を注いでいた。

すでに同台地上においては、静岡大学教授(現名誉教授)・内藤晃氏を中心とする人文学部考古学研究室によって、舟久保古墳の墳形測量なども行われており、同台地一帯の学術的重要性が喚起されていた時期でもあった。

鈴木氏は、寺の谷3号墳が直面している状況を町教委に伝える一方、静岡大学・内藤晃氏及び小笠郡下教師の自主的な教育研究グループに所属し、社会科教育の一環に郷土の遺跡・遺物等の考古資料を積極的にとりあげて教育実践の場において活用していた栗田有城氏(小笠町立岳陽中学校教諭)にも伝えた。

そして、内藤晃氏によって現地の視察が行われ、発掘調査の必要性が鈴木氏立ち合いの下に確認される。町教育委員会に対しても寺の谷3号墳発掘調査の必要性が伝えられ、県教育委員会社会教育課に対しても寺の谷3号墳の状況が内藤氏によって説明された。その結果、調査終了まで道路整備工事等は中断の措置がとられるに至った。以上のように、寺の谷3号墳が何の対策も講じられないまま煙滅することは許されないという雰囲気醸成されていった。

そして、内藤晃氏を中心にして静岡大学人文学部考古学研究室が発掘調査を行い、教育研究グループの教師も発掘調査に参加することとなった。発掘調査の必要経費について静岡大学から発掘調査に参加する者の旅費・滞在中の食費・参加学生に対する日当(単価500円)等は小笠町教育委員会が負担し、撮影費・調査器材等は静岡大学考古学研究室が負担することとして、宿舎は町立小笠保健センター(現小菊荘)とされた。

こうした発掘調査の準備は、一重に鈴木忠雄氏の奔走によるものであった。発掘調査は、10月初旬の静岡大学秋期休業時に実施することになった。

(2) 発掘調査

発掘調査団の構成を列記すれば下記のとおりである。

発掘主体	小笠町教育委員会
発掘担当者	内藤晃(静岡大学人文学部教授・現名誉教授)
調査員	市原壽文・藤田等(静岡大学人文学部教官)、栗田有城
調査補助員	大槻伸・鈴木幸子・遠藤才文・中川真文・宇佐美武嗣・長屋(旧姓 長峰)裕子・斉藤(旧姓 須藤)美紀子・小俣洋一郎・岡田洋・山村冴子・大西健一・中沢正俊・岩波(旧姓 見上)洋子・中島延佳(以上静岡大学人文学部学生)・有国尚(静岡大学農学部学生)
事務局関係	松山昌宏(小笠町教育長) 松下保(小笠町教育委員会)

以上のような構成で調査は進められた。調査補助員の静岡大学学生は、発掘調査に従事した当時の学生諸君であって現在は社会人としてそれぞれ活躍している諸氏である。

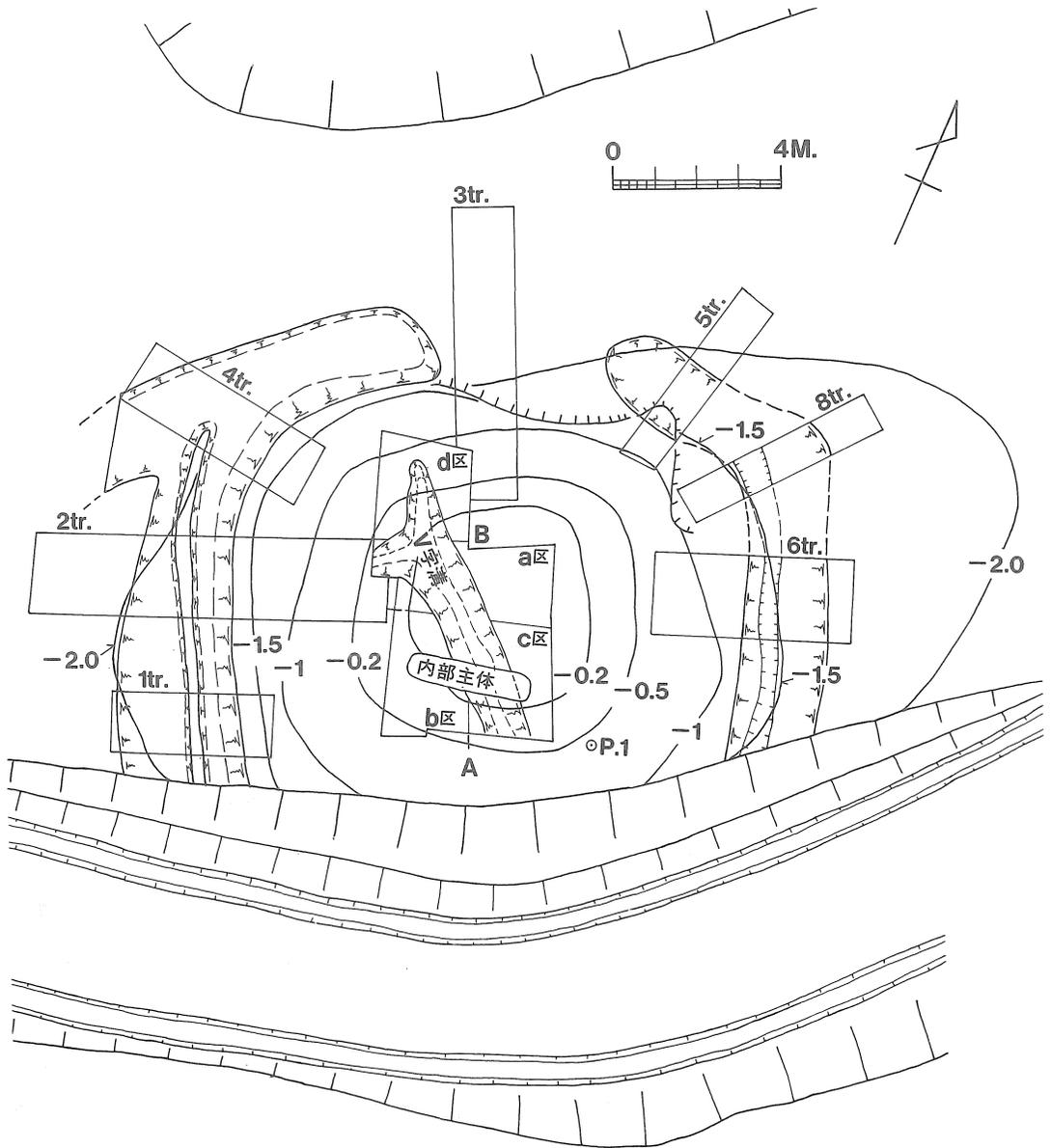
また、事務局関係として発掘調査に伴う諸般の事務推進にたずさわられた町教育委員会事務局両氏の役職も、発掘調査時の担当である。

発掘調査の期間は、昭和47(1972)年9月30日～10月11日の12日間があてられた。

発掘は、墳形と墳丘の確認及び内部主体の確認とに分けて作業を進めた。

墳丘部分の発掘は、7条のトレンチを放射状に設定した。トレンチの位置は、第2図に図示しているように、墳丘西南隅に1トレンチ(4.5×1.5メートル)を設定し、時計廻りに2トレンチ(8.5×2メートル)、4トレンチ(4.7×1.5メートル)、3トレンチ(7×1.5メートル)、5トレンチ(5×1メートル)、8トレンチ(5×1メートル)、6トレンチ(4.5×2メートル)の順に位置する。7トレンチは4トレンチと3トレンチの中間に設定する予定であったが、4トレンチ側より周溝の平面的発掘を進め7トレンチを設定することを省略した。2トレンチと6トレンチとは、墳丘全体をほぼ東西方向に切断する位置に設定し、これと直角の方向、逆T字状に3トレンチを設定した(第2図参照)。

墳頂部は、はじめC・D点を結ぶ線からB点の位置する東西方向の線までに、2トレンチ・6トレンチを墳頂部でつなぐ位置で発掘区を設定した。南北約1.8メートル、東西3.6メートル前後の広さであり、a区と稱しておく。c点から東に1メートル、南に3メートルの区画b区を設定し、逆L字状の発掘区画を設定して掘り下げたところ、内部主体の存在を確認したので、a・b区の南東部に続く範囲を2.8×2.8メートルの範囲をほぼ方形に掘り広げて内部主体の全形を露出し、c区とした。後に、内部主体を横断して掘り下げ



第2図 寺の谷3号墳墳形測量図・発掘区画位置図

(等高線数値は比高、単位はメートル)

たところ、下部にV字溝が発見されたので、a区の北東側にd区(南北2.4~6.4メートル、東西2.2メートル)を拡張してV字溝を確認した。

以上が、墳頂部発掘経過の概略である。

3. 寺の谷3号墳の発掘調査

(1) 寺の谷3号墳の墳形

第2図に墳形の測量図を示している。墳形を示す等高線の数値は海拔標高ではなくて比高で示している。寺の谷3号墳が、海拔標高で約150メートルの高さに位置することはすでに述べた。

墳形については、古墳の南を東西方向に走る道路法面によって、南斜面は約30度くらいの傾斜でけずられているために、本来の墳形全体を肉眼で観察することはすでにできなくなっていた。古墳の南側外縁は、道路北側の測溝あたりまで及んでいたことは充分考えられる。古墳封土は平面形で東西方向の墳裾～墳裾の幅12メートル、南北方向については推定値で約11.4メートルと思われる。それに西側では周溝の幅2.6メートル前後がプラスされ、東側・北側では約2メートルがプラスされることになる。

封土の高さは、墳頂部平坦面の周囲をマイナス20センチメートルの等高線がめぐり、周溝内側あるいは東側では周溝と重複してマイナス1.5メートルの等高線が走ることから、約1.3メートル、周溝の外側から測れば、1.8メートルになる。

墳丘をとり囲んでめぐる等高線を見ると、墳頂部平坦面の周囲をめぐるマイナス20センチ等高線は、西南部に隅を切ったようないびつさがみられる他は、隅丸方形状をしている。マイナス50センチの等高線では、西側は直線的、東側では直線的とは言えないまでも西側とかなり平行的であり、南北部分は激しく張って弧状を描いている。マイナス1メートル等高線にしても、逆五角形状に直線に近い弧が続くように見られ全体として円に近い形をしてはいない。マイナス1.5メートル等高線は、北側の封土が部分的に崩落した部分を欠失するが、西側ではゆるく張り出してはいるもののかかなり直線状であり、墳裾の線とほぼ一致している。東側では、マイナス1メートル等高線と平行して、本来の墳裾をこえて張り出しているのがわかる。そして、マイナス2メートル等高線は東西にいびつな不整楕円形をしており、寺の谷3号墳が立地する地点としてわずかな高まりを選地しているのがわかる。

以上のように墳形を肉眼的にみるならば、封土の状態からは円墳と断定することはできなかった。更に、周溝の調査などが進行するに従って、寺の谷3号墳の封土平面形を円墳と判断しえない資料が追加されていった。

(2) 封土と周溝の調査

古墳封土の原表面および周溝などを確認するために、7条のトレンチを放射状に設定したことはすでに述べた(第2図参照)。

各トレンチの断面実測図は第3図に集成している。本図には各トレンチの東南壁・東壁・南壁断面図を示しているが、古墳南側地点から各トレンチ断面を見通した状態にまとめたため、3トレンチを除き他は結果的に裏面から断面図を見た状態に統一して図示することになった。

墳丘の構造に関して先ず注目されるのは、5・8・3・4・2・1トレンチの封土最下部に共通してみられる淡褐色粘土層(8層)と、5・2・1トレンチにおいてはその上部に堆積する褐色粘土層(7層)とである。これらの粘土層は、墳丘築成のために人為的に搬入されたものではなくて、牧の原台地の基盤を構成する牧の原礫層の上部に堆積する更新世の堆積層と思われる粘土層である。

3・4トレンチにおいては8層・淡褐色粘土層上に褐色粘土層(7層)の堆積を欠き、褐色土層(6層)がみられる。6トレンチでは、墳丘部分及び墳裾～周溝の部分では6層の褐色土層までで発掘を終り、7・8層の褐色や淡褐色の粘土層まで発掘は及んでいない。

また褐色土層は6層だけではなくて、その上位には層厚約20センチ弱の黒褐色土層を挟まして5層として分離される別の褐色土層もあり、古墳の東南側に褐色土層全体が厚く堆積しているのを知ることができる。6層・5層の褐色土層は自然堆積した土層であり、人為的に積成された層ではないと思われ積成の時期は完新世に比定される。

そして、墳丘部分全体の上表部を覆って暗褐色土層がみられ、表土層を構成している。2トレンチ及び3トレンチの墳裾部分においては部分的に本層の堆積を欠き、墳裾部分の基層に相当する諸層(7・8層)が露出していた。表土層を構成する暗褐色土層は、色調が明るく全体にソフトで締り具合は悪く、3層の暗褐色土層とは組成を異にしている。

以上のようなトレンチ内での観察結果からすれば、表土層を除去した状態が本来の墳丘表面にもっとも近い状態を示していると思われる。各トレンチにおいて表土層下に検出された土層は、8トレンチでは淡褐色土層(8層)、1・2・5トレンチでは褐色土層(7層)、4・3トレンチでは褐色土層(6層)、6トレンチでは褐色土層(5層)であることはすでに述べた。そして、これらの土層は何れも人為的に積成されたものではなく、自然の堆積層であることも述べた。以上のような諸点から判断して、寺の谷3号墳の墳丘は表土層下に見られた8層～5層の土層の堆積によって構成された微高部分の表面を削ってつくられた可能性を指摘することができる。

そして、古墳築造後墳丘表面に二次的変形が加えられていないとすれば、墳丘の傾斜は約21～22度を測ることができる。墳丘表面に葺石などはみられなかった。また、墳丘の中段と思われるような施設も確認できなかった。

墳丘末端＝墳裾の外側には、墳丘北東側の3トレンチとその周辺を除いて周溝の内壁に続くのであるが、移行の状態としては次のような現象がみられた。

墳丘南西側の1トレンチ、同北西の4トレンチ、同北西西の6トレンチにおいては、水平距離で約1メートルにわたって墳丘表面の傾斜と異なる30～40度の急傾斜を経て周溝内壁に移行していく。周溝は、墳丘北西西の3トレンチまでは及んでいないのであるが、墳裾の急傾斜は共通している。ところが、墳丘南西西側の2トレンチ、同北東の8トレンチ、同北北東の5トレンチにおいては墳丘斜面から直接周溝内壁へと移行しており、墳裾に急傾斜面が設けられているような現象はみられなかった。

説明した何れが墳裾本来の状態に近いかについてを判断する決め手がなく、結論を得ることは困難であった。

墳丘の南南東側は道路によって除去されているために、墳丘の南西西～北～北北東側においてだけを確認するにとどまらざるをえなかった。

墳丘の西～北側においては、はじめ1・2・4・3の各トレンチ内で周溝を確認した後、トレンチ間の周溝部分を発掘して、周溝を平面的に露出した。また墳丘東側では、5トレンチの北西側及び6トレンチの南東側においてのみ周溝を平面的に露出した。

先ず、トレンチ内での周溝に関する観察結果の第一にあげられるのは、重複関係の認められる新旧2条の周溝が認められたことと思われる。

墳裾外周部分の地表においては、1層の暗褐色土層が表土層としてみられた。墳丘南西西に位置する2トレンチにおいてのみ、墳裾部分に暗褐色土層の堆積を欠き、7層・褐色粘土層が露出していた。2トレンチの南西半分、墳丘外周部分には暗褐色土層はみられないうで、炭化物を多く含んだ黒褐色土層が表土を構成していた。炭化物の混入および色調においてのみ暗褐色土(1a層)と異なることから判断して、1b層として扱おうと思われる。

1a・1b層の表土層下に堆積する土層は、暗褐色土層と呼びうる2層である。1a層の暗褐色土層と比較して、有機物を多く混入し色調はやや暗い。1・2・4・6・8トレンチの断面にはみられたが、3・5トレンチにはみられない。本層の上端部分は、2トレンチ以外では墳裾を覆う状態に堆積しているのがみられた。そして本層の広がる範囲は狭く、古墳の外側に向かっても余り延びることなく終っており、周溝が埋り終らない凹みの

部分に主として堆積した土層である。

2層・暗褐色土層下には、3層・灰褐色土層及び4層・暗褐色土層がみられる。共に土層中の湿潤度は高く粘性が強かった。4層中には、径4センチメートル前後の円礫を含んでいた。3層の色調全体に黒味を帯びているのは、いわゆる黒ボクと稱される腐植土の混入量が多いためと思われる。この3・4層は、重複関係にある新(以下外溝と呼ぶ)・旧(以下内溝と呼ぶ)2条の周溝を埋めて堆積した土層であり、4層が先に堆積し3層は4層の一部を切断して堆積した新旧関係が、各トレンチ内の断面に共通してみられた。

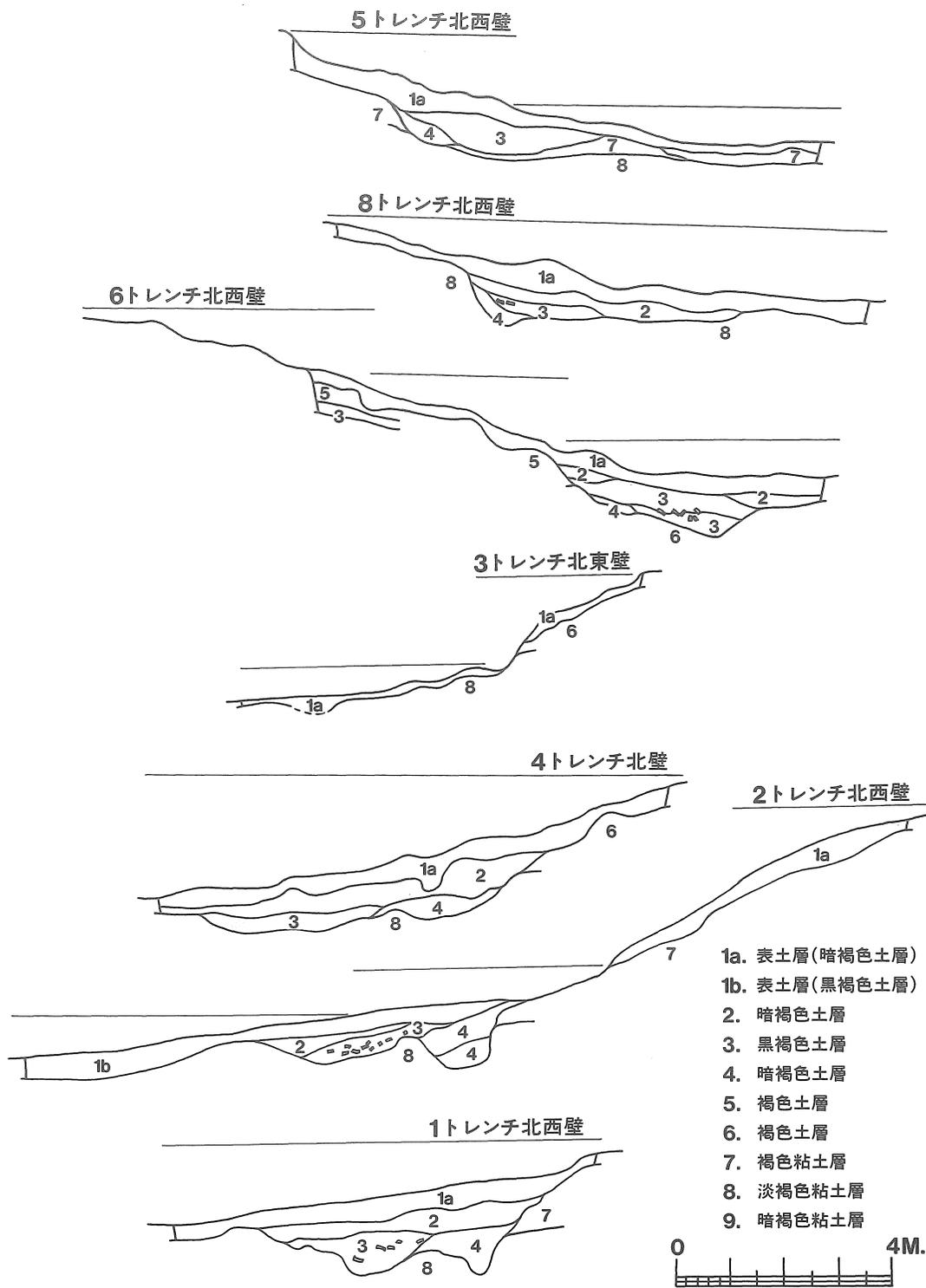
下層に位置する4層は、8層の淡褐色粘土層と部分的には7層の褐色粘土層を掘り下げて設けられた内溝を埋め、墳裾を覆って終わっているのが何れのトレンチにおいても見られた。4層に覆われた墳裾の状態は、高さ20～30センチで40～60度の傾斜を示し周溝内壁の傾斜に続いている。4層の墳丘外側末端は、外溝を埋める3層・黒褐色土層に切断されて低く傾斜しながら終るのも、各トレンチに共通してみられるところであった。そして、4層中から遺物は全く検出されなかった。

3層・灰褐色土層も、8層・淡褐色粘土層に掘り込まれた外溝を埋め、内溝を埋める4層・暗褐色土層と切り合い関係を示しながら上位に堆積することはすでに述べている。墳丘の東側と西側では、3層による4層削除の状態には違いがみられた。墳丘西側においては、内溝を埋める4層・暗褐色土層末端が3層によって削られるにとどまり、内溝の外側壁そのものが3層によって削除されるという状態はみられなかった。墳丘西側においては、3層が4層を削る状態は激しく、6トレンチ東南壁断面にみられるように内溝及び4層を申し訳程度に残し、外溝が内溝全体を覆っているのがみられた。

外溝を埋める3層の上半部と下半部では様子の異なるのがみられた。下半部は含水量が多く粘性の高い湿潤な状態がみられ、上半部では湿潤度が低いという違いである。3層上・下半部での湿潤状態の違いは、土層色調の濃淡として見られたが6トレンチ東南壁以外ではその差を実線で示せる程鮮明ではなかった。3層の上・下半部境界にみられた顕著な現象は、大形の破片を含む埴輪片が若干の上下はあったがほぼ面をなして検出されたことであろう。4層が無遺物の土層であったことと比して、際立った違いといえることができる。

以上に、内・外2条の周溝を埋める4層・3層の状態について述べた。以下に周溝そのものの状態を説明しておきたい。墳丘の南側が道路で切断されているので、西側と東側の周溝の状態について説明を加える。

墳丘西側では、1トレンチ南側の道路法面から2トレンチと4トレンチの間までの7.5メートルにかけては、内溝と外溝とが約40センチの間隔で平行しているのがみられた。



第3図 1・2・3・4・5・6・8トレンチ断面実測図

この範囲の内溝上端の幅0.8～1.4メートル、溝底の幅40～60センチ、溝の深さ90～60センチで北に向って序々に浅くなるのがみられた。また、1トレンチでは南壁断面にみられるように溝底の中軸線沿いに幅40センチ、深さ30センチ程に一段深くなっているが、この掘り込みは北に向って序々に浅くなって消えていた。これと平行する範囲の外溝は、道路法面で上端の幅1.6メートル。2トレンチと4トレンチの間での幅70センチとせばまる。溝底の幅は1トレンチで80センチ、2トレンチでは40センチである。

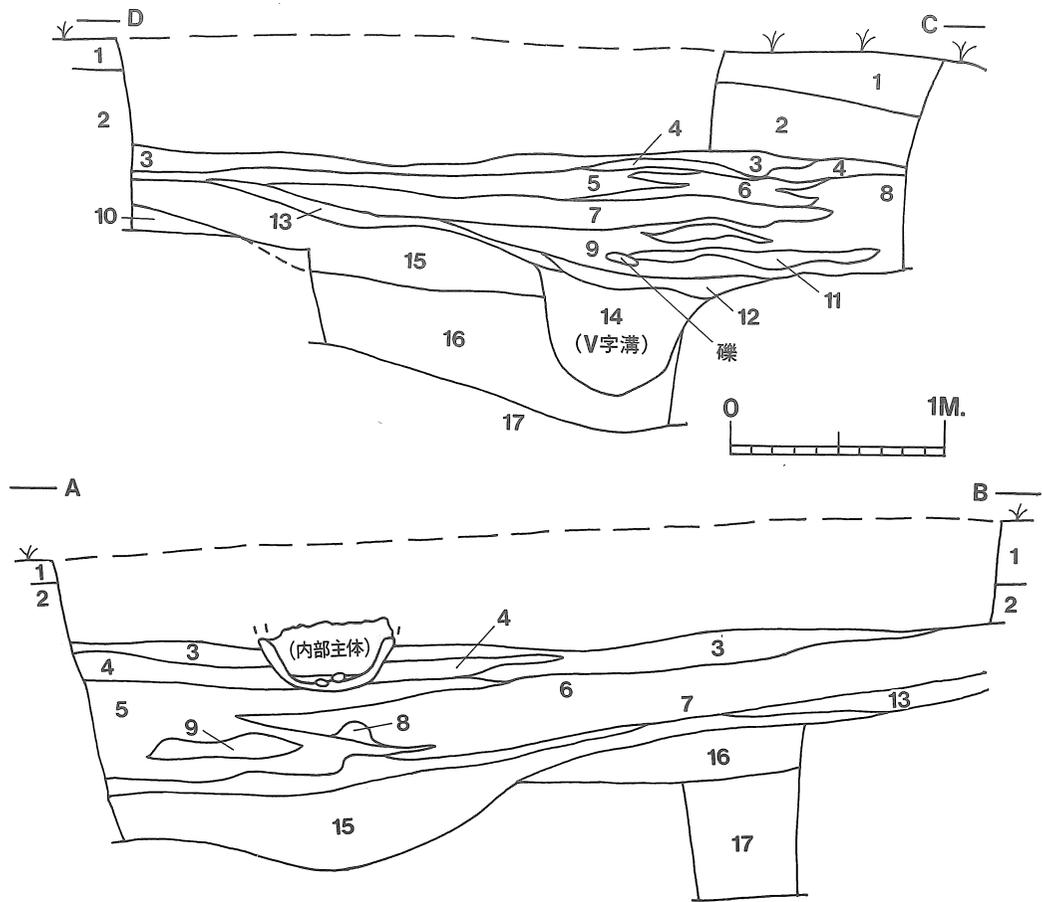
第2図に見られるように内・外溝の隔壁は4トレンチの中央で終り、それより先は π 状に続いている。内・外溝の北西側にくの字状に曲がる溝は別個のものではなく、4トレンチ南壁断面(第3図)にみられるように、内溝を切断して設けられた外溝に続いている。道路法面から墳丘の北西側をめぐって延びた外溝は、4トレンチにおいてくの字なりに曲って、北北東に約5.5メートル続いて終る。北北東に曲る外溝末端は、4トレンチの西半部から南西方向にもものびているが、この部分がいかなる機能をもつかは判断できないのであるが、溝がのびる方向は寺谷の谷頭と一致する方向である。

墳丘北東側では、3・4層の切り合い関係から外溝と判断された周溝が、道路法面から8トレンチまで7メートル続き、北西方向に逆くの字状に4.8メートル延びて終っている。外溝上端の幅は何れにおいても約2メートル、上端から溝底までの高さ40～65センチである。内溝は、外溝の幅の中にそっくり入ってしまい、道路法面から8トレンチにかけて40センチ前後の幅で続いていた。内溝幅の数値は内側壁から溝底の一部にかけての幅であって、内溝全体の幅を示す数値ではない。溝の深さは残存部で20センチ～60センチが認められた。

墳丘の北西方向に設定した3トレンチにおいては、内・外溝共に検出することはできず、外溝は3トレンチ北西壁から40センチ北西の地点と、同トレンチ南西壁から南西2.2メートルの地点でそれぞれ終っている。3トレンチ付近で内溝がいかなる状態にあったかは不明なのであるが、墳丘北西側に内溝が続いている痕跡は認められなかった。

墳丘南東側は道路が切断しているために、周溝がこの部分で続いていたか、墳丘北西側のように途切れていたかについては知ることができなかった。

以上が、墳形と周溝に関する調査結果である。



第4図 墳頂部 A-B, C-D断面実測図

第4 図土 層凡 例	C-D断面図層位ナンバー	A-B断面図層位ナンバー	土層の名称
	1 層	1 層	1 層
2 層	2 層	2 層	黒褐色土層
3 層	3 層	3 層	灰褐色土層
4 層	4 層	4 層	黒褐色土層
5 層	5 層	5 層	黄灰色土層
6 層	6 層	6 層	灰褐色土層
7 層	7 層	7 層	暗灰褐色土層
8 層	8 層	8 層	黄灰褐色土層
9 層	9 層	9 層	暗黄灰色土層
10 層	—	—	黒褐色土層
11 層	—	11 層	灰褐色土層
12 層	—	—	炭化物・灰層
13 層	—	—	暗褐色土層
14 層	—	14 層	暗褐色土層
15 層	—	15 層	黒褐色土層
16 層	—	16 層	灰褐色粘土層
17 層	—	17 層	淡褐色粘土層

(3) 内部主体の発掘調査

墳丘南西側斜面に設定された2トレンチ、北東側斜面の6トレンチとは、封土をほぼ東西に切る直線上に設置されている。墳頂部の発掘に当たっては、2・6トレンチの北西壁をつなぐ線上に壁面が一致する位置に(第2図)、南西～北東方向に長さ3.7メートル、幅2メートルのa区をトレンチ状に設定した。a区南壁のC—Dセクション(第2図)の状態は第4図に示した。

墳頂部に設定したその他の発掘区画は、a区の南東側にb区(3×1.4メートル)とc区(2.8×3メートル)を、北東側にはd区(2.5×2.3メートル)である。a区の西南辺の一部を西南方向に拡張するように、鍵の手状(80×60センチ)に区画をのばして、2トレンチの北東角もd区にとりこんで掘り下げた。各区画の位置は第2図に示した。a区南東壁のC—D断面およびb区北東壁のA—B断面の位置は第2図に示し、両断面の実測図は第4図に集成した。

墳頂部の発掘区画の進行過程に、どの区画においても墳頂部の敷石などの施設を確認することはできなかった。

最初a区の発掘から着手したところ、C—Dセクションにみられるように、層厚30～60センチの1層(土層の名称は第4図凡例参照。以下同)、同50～70センチの2層を除去すると、3層～12層まで10～30センチ前後の厚さの諸土層がかなり複雑に堆積しているのがみられるばかりでなく、8層を除く4層～13層の諸層は分布が小範囲であり、これらの諸層がセクション北西寄りでは8層と指交関係にあるのがみられる。こうした土層の堆積状態は、これらの諸層が自然に堆積した土層ではなくて、墳丘封土として人為的に積み上げられたことを思わせる状態であった。特に第12層は材の炭化物と灰のみによって構成されており、明らかに人為的な手の加えられた層であることを示しており、上記の判断を裏づけていると思われた。

そして、墳頂部より13層の暗褐色土層の深さまで古墳の内部主体に相当するものは検出できなかった。墳頂部からの深度2.1～2.4メートルで、第15層＝黒褐色土層表面で幅約90センチ、第16層＝灰褐色粘土層にかけての深さ約60センチの規模で掘りこまれたV字溝で、中にはソフトな暗褐色土(第14層)が詰まっているのが確認された。

内部主体の確認とは別に、V字溝を追跡するために設けたのがd区である。V字溝の末端は、d区でY字状に分岐しており、しかもその一端はd区北西端から約60センチの所で細く終っており、他端はd区西南隅に向かって細く狭まっていた。

a区の南西から南東方向に、2×3メートルのc区を設けた。はじめ、c区南西辺を幅

1メートルでトレンチ状に掘り下げたのであるが、上表部に墳頂部の敷石などはみることができなかった。はじめ、墳頂から1層(黒褐色土層；表土層)、2層(黒褐色土層)を厚さ65センチにわたって除去した深さで、長径20センチ前後の円礫が60センチの幅でほぼ東西方向に長く同レベルで分布することがわかり、礫塊の東南隅には刀子1が礫面に接して発見された。礫塊の深さまで掘り下げた東・西側の断面では、厚さ10センチ程の灰白色粘土が礫塊の両端から立ち上がっているのが見られたので、礫塊と灰白色粘土を追って、c区の北東側及びb区へと墳頂部の発掘範囲を拡げた。

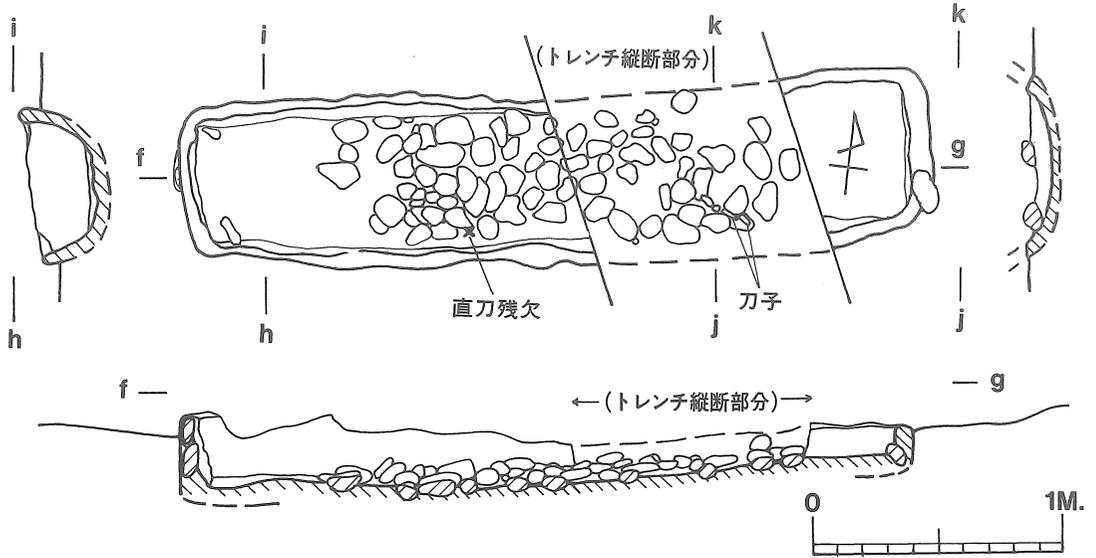
その結果、第5図に示すような内部主体と判断される施設を検出することができた。

内部主体長軸線の方向はN—79°—Eであり、ほぼ東西方向に長く位置し、わずかに北に振れている。

内部主体の下底は、3層の灰褐色土層中に据えられているが、主体の掘り方は明らかにできなかった。棺底及び四側には、厚さ5～10センチの灰白色粘土を貼っている。平面形の法量は、長軸線上の粘土外面で3.3メートル、内面で3.15メートル、幅の外面で68～80センチ、同内面で59～68センチを測ることができた。粘土の内法、底面と側板の接点での幅を比較すると、東端で60センチ、西端で52センチ、わずかに西に向かってせばまっはいるが、全体として狭長な長方形に近い平面形ということができる。

粘土の底面と四側の関係は、第5図f—gセクションにみられるように、小口側に関してはほぼ直角に立ち上がっている。横断面に関しては、第5図h—i・j—kセクションにみられるように、底面はわずかに中凹みになっており、両側は外開きにゆるく傾斜しながら立ち上がっている。四側の灰白色粘土の遺存状態は部位によって異なるが、底面との変換線からの高さが、西側の小口で29センチ、東側小口では13センチ、北側では17～30センチであった。

棺内に堆積する褐色味を帯びた黒褐色土を除去すると、まんべんなくソフトな灰白色粘土が8センチ前後の厚さでみられた。粘土の表面には点々と円礫が顔を出しているのがみられた。棺内のソフトな灰白色粘土の除去に続いて、c区南西辺を掘り下げた試掘構内で露出した礫塊の続きを追跡する。試掘溝北東辺より東側では棺床におかれた礫はなく、同南西辺から1.13メートル西側までの棺床に礫塊の続くのがみられた。第5図の内部主体平面実測図にみられるように、棺底の東西両側に余白を残し、中央部分の2.17メートルの範囲にのみ礫が分布しているのがみられた。礫面は、横断面においてわずかに中凹みになるように敷き詰められており、棺床の灰白色粘土の一つ一つが据えられていて、上位から崩落したと判断されるような事実はみられなかった。以上のようなことから、礫塊と呼んだ



第5図 内部主体実測図

ものは棺底の一部に置かれた礫床と判断され、粘土床と共に棺底を構成しその一部に相当すると判断される。

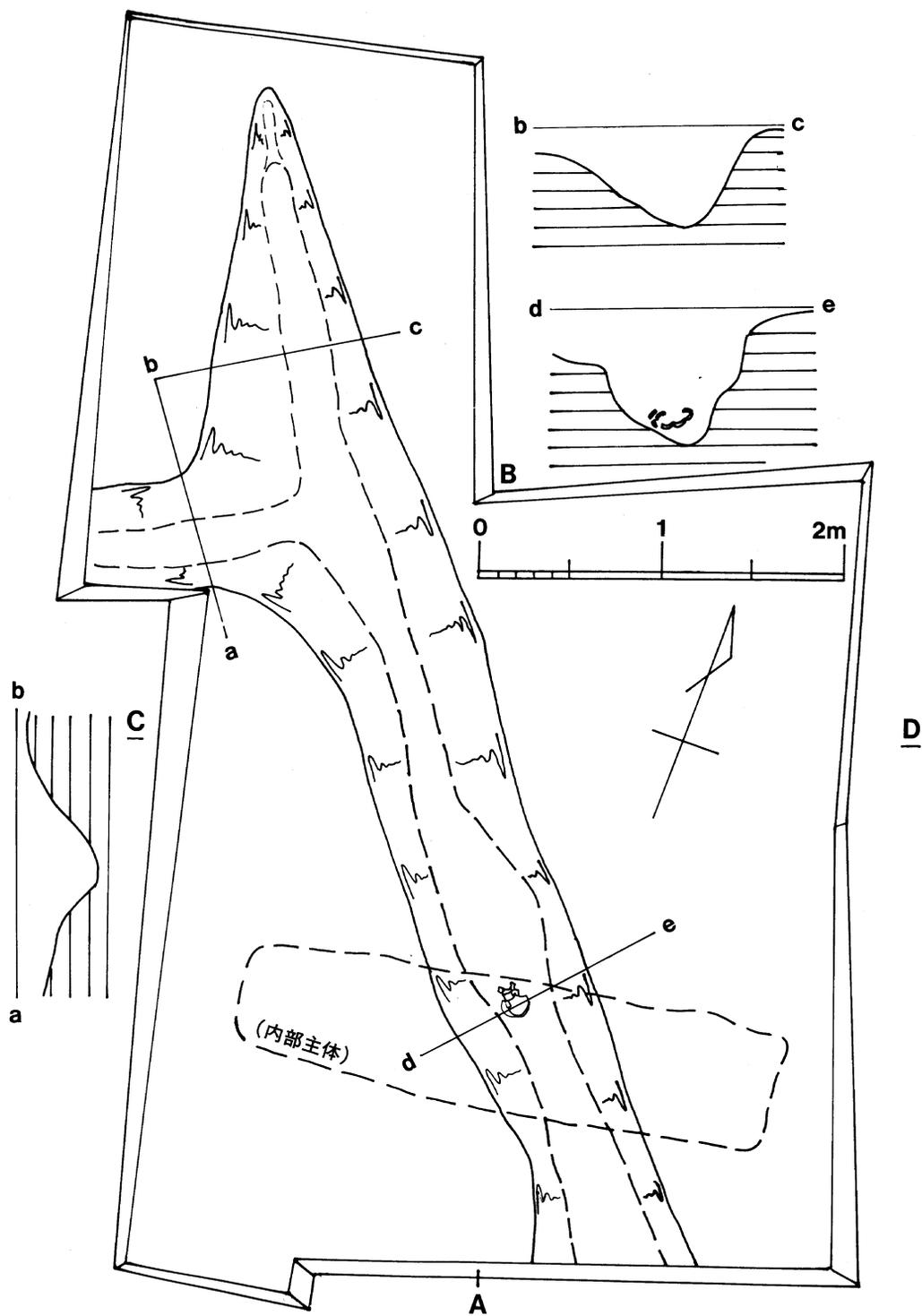
棺内に落ち込んだ灰白色粘土と棺底との間には、有機分の含有量の多い暗褐色土の薄層が1面みられた。棺床から検出された出土遺物は、第5図の平面実測図に出土地点を示している刀子と直刀残欠各1点であった。

以上が、内部主体の発掘過程における観察の結果である。墳頂部の発掘区画は、下位のV字溝を露出するために全面を掘り下げているが、他の内部主体あるいは埋葬施設などは発見されなかった。

(4) 弥生時代のV字溝

墳頂部発掘区画のa区東南側のC—Dライン(第2図)の断面実測図(第4図)にみられるように、内部主体が位置する3層(灰褐色土層)・4層(黒褐色土層)より下位の15層(黒褐色土層)表面から、幅約80センチ、深さ約50センチ、溝底は16層の灰褐色粘土層に達しており、溝の中は炭化物片などの有機物を含む14層(暗褐色土層)によって埋められているのが発見され、これをV字溝であると判断した。

V字溝が掘り込まれるのは15層(黒褐色土層)表面からである。15層表面が、古墳築造



第6图 内部主体下部V字沟实测图

前の旧地表であり、前々項((2)封土と周溝の調査)に説明した旧地表に続く面である。

内部主体の調査後、引続いてV字溝全体を露出する作業を進め、第6図に示すように発掘区画内でのV字溝を確認した。

c区東南壁からd区北西壁寄りのほぼ中央で一端は終わっているが、d区南隅に向けてY字状に分岐しているのがみられた。分岐部分の溝底までの深さはa—b横断面のあたりで35センチにすぎず、d区南隅に向かってさらに浅くなっていた。分岐部分を先端まで完掘しなかったのであるが、溝底の状況などを判断して先端間近であると推察された。発掘区画内ではc区東南壁より外に向かってV字溝は延びているが、台地南側斜面を南南東方向に斜向するような方向に向かっては全形は確認していない。

V字溝上縁部での幅は、c区・a区の溝主要部分で約80センチ前後、d区の先端部・分岐部へと幅はせばまり、溝底も徐々に高くなって終わっている。

溝中を埋める土層は均質な暗褐色土でソフトであり湿潤度も高く、炭化物細片の混入量も多い。遺物は、第6図d—eセクションが横断する溝底に、壺形土器1点(第17図125)がつぶれて検出された(第3図版a・b)。壺形土器の諸特徴には弥生後期の特徴がみられ、V字溝が古墳築造以前に営まれたものであることがわかる。

4. 寺の谷3号墳の出土遺物

(1) 内部主体の出土遺物

第16図126の刀子と、127の直刀残欠とが内部主体の出土遺物であり、両例の出土地点については第5図に示している。

刀子は全長17.3センチで、身の最厚部で8ミリを測ることができ、全形を良く残している。身の長さ11.3センチ、柄の長さ6センチ、両部分の境目は画然と分かれないうで続いている。

刀身は全長6.8センチ、刀幅2.15センチの残欠であり全形を知ることはできないが、鉄刀としては大形のものとは思われない。

内部主体内部が、発掘前の攪乱と判断されるような痕跡はみられなかったのであるが、内部主体内の出土遺物は以上の2点にとどまった。

(2) 出土の埴輪について

本古墳出土の埴輪の内容には、以外と思われるくらいの変化がみられた。すでに「3- (2)封土と周溝の調査」に述べているように、埴輪は何れも残欠ないし破片であって、すべてが周溝の外溝と呼んだ溝中の黒褐色土層中から検出されており、原位置にみられたものは1点もなかった。埴丘部分において埴輪が置かれたと判断されるような痕跡も認めることはできなかった。

出土した埴輪の主要なものは、第7図～16図および第6図版～16図版に集成している。埴輪の種類としては、円筒埴輪及び象形・器財埴輪と思われるものが含まれている。埴輪は、円筒と象形・器財とを問わず全体に小形であり、焼成も良好とは言えない。特に円筒埴輪においては不良な焼成が目立った。以下に、円筒埴輪から順に観察結果を記述していく。

○円筒埴輪

円筒埴輪の資料は第7図～第13図の78～89に集成しているが、全形を知ることのできるものは1例もない。口縁部から胴部にかけてみられる資料、あるいは口縁の一部を欠失し底部までのみられるものなどを、第7図・第8図に示した。また、口縁部の破片については、第11図の52～59に示している。

石膏で補って復元形を知りうるものを第8図9・4に示しているが、復元高で約45センチ、口縁の径(4)は19.2センチで、口縁部は単純に外反しながら薄くなり、口縁端は丸く終わっている。その直下から底部にかけて、径15.6センチ前後の円筒状の胴部が続き、器壁

の厚さは2センチ前後である。凸帯は2段で、凸帯間には径12センチ程の円孔2個が相対して明けられている。胎土の粘土はち密であるが、焼成は不良でもろい。第8図9などは焼き締りが悪く表面全体に薄くかけられているち密な粘土が剥落して胎土の粗面が全面にわたって露出しているために、埴輪表面の刷毛目などは全く認められなくなっている。以上が、ほぼ全形を知ることのできる数少ない円筒埴輪についての観察結果であるが、円筒埴輪各部位の残欠や破片から第8図9の資料でみられなかったような諸点を補っておきたい。

円筒埴輪口縁部の状態を知ることのできる資料は、第7図1～3、第8図4、第11図53～59などである。その形態には

- (1) 円筒状の胴部に対して、口縁だけが外反するもの(第7図1、第8図4、第11図53・54・55・58・59)。
- (2) 上段の凸帯上から口縁にかけてが、わずかに外反するもの(第7図2、第11図56・57)
- (3) 上段の凸帯上から口縁部分がらっぽ状に開くもの(第7図3)。

などの変化がみられた。図に示した以外の口縁部破片からも(1)とした特徴のみられる資料がもっとも多くみられた。

断面にみられる口縁の状態としては、丸く整形されたもの(第7図1・2、第8図4、第11図54)、口縁端部が直截状に終わっているもの(第11図55・57)、口縁端部が中凹み状に整形されているもの(第11図53・58・59)などがみられるが、口縁部の形態上の特徴との相関関係はみられないようである。その他、口縁部の整形痕については、表裏面の整形に施された刷毛目痕が消える程度に、口縁に沿って内外面共横なでして仕上げているのが何れの資料にも共通してみられた。

胴部の凸帯が貼り付けられた部分以外の資料は、第7図6～8、第8図4・13と第9図・第10図に集成している。

器壁の厚さ0.8～1.8センチであるが、1.3センチ前後のものが最も多い。表面の剥落したものを除き、すべての資料に刷毛目が見られる。刷毛目には粗(第7図2、第8図13、第9図15～18・20・25・28・32、第10図35～37・40・41・44・46～49)密(第7図6、第9図14・21～23・26・29～31・33・34、第10図42・43・45・50)の変化が認められる。刷毛目の方向は、ほとんどが縦方向として扱いうるものである。内面に刷毛目のみられるのはごく少数(第7図2、第9図15・22、第10図35)がみられるにとどまり、刷毛目の方向は斜(第7図2)・縦(第9図15)・横(第9図22、第10図35)方向などがみられるが、斜または横方向の刷毛目は口縁部内面側にみられる。

凸帯の付く部分の資料は第7図1～3・5・7・8、第8図4・9、第11図60～72、第12図に集成している。

第7図1、第8図9でみられるように凸帯は2段が付けられている。凸帯の断面の状態としては、何れも低平な台形状をしているのがみられる。凸帯とその両脇は丹念に横なでを繰り返し行って整形しており、刷毛目の一部も磨消している。また、円孔は凸帯より下位に明けられるのであろうが、円孔が横なでによって整形された凸帯の一部を削り取っているのがみられる資料もある(第12図76)。

円筒埴輪全体の形態が円筒状に近いとはいえ、下段の凸帯の下部から底にかけてやや細くなるのがみられる(第7図5・7、第8図9・12・13、第13図78～81・88・89)。表面に刷毛目の整形痕の認められることは言うまでもないが、刷毛目の変化等は胴部破片について説明した現象と等しく、整形の方向としてはほぼ縦方向に施されている。

埴輪の底部には、目につくような圧痕などはみられることなく、しばしばへらけずりされたような痕跡が認められるにとどまった。

その他、口縁部破片1点(第16図98)と底部破片1点(同図100)を含めて、計4点(同図99・101)の須恵質埴輪破片が検出されている。そのうち101の破片は、縦方向の刷毛目の一部が横なでによって磨消されていることから、凸帯直下の破片と思われる。98の口縁部破片は断面の状態から、他の酸化焰焼成された円筒埴輪の口縁部形態(1)として分類したものに等しいし、刷毛目の状態にも先に述べた粗なものと同じ状態が認められる。4点の破片によってそれぞれ色調は異なるが何れも淡い鼠色をしていて、固く焼成されている点が共通している。

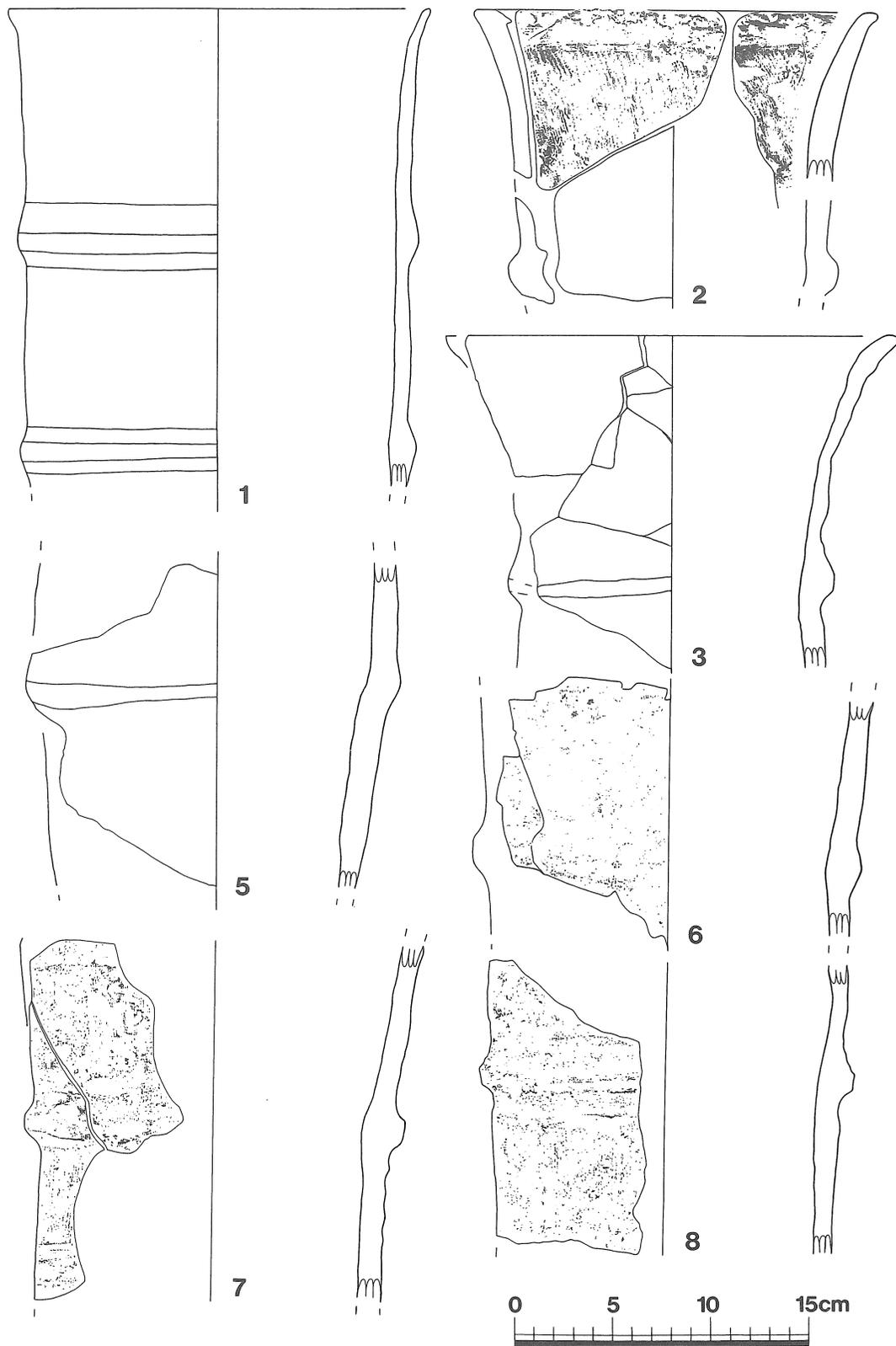
円筒埴輪全体の中で、須恵質埴輪の資料は4点以外全く認められなかった。以上が、円筒埴輪の観察結果である。

○朝顔形円筒埴輪

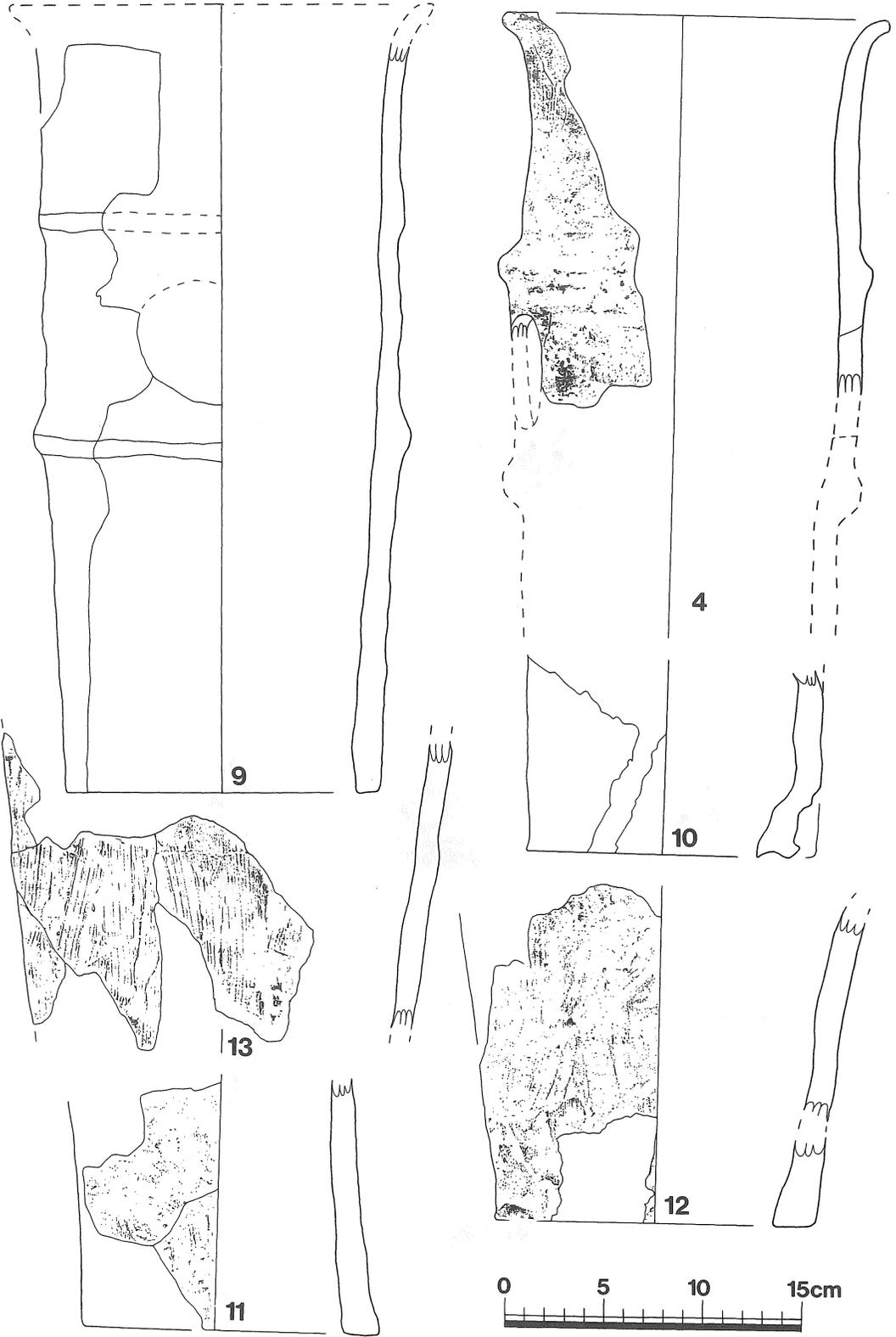
ごく少量であるが朝顔形円筒埴輪の破片が検出されており、第13図90～94に資料を示した。

同図94は頸部から肩にかけての破片であり、くびれ部に横なで整形で仕上げられた凸帯がみられ、肩の部分に縦方向の刷毛目がみられる。90～93は、頸部のくびれ部から口縁部にかけて広く開く開口部の破片であり、開口部途中に付された凸帯がみられ、凸帯部以外の表面には刷毛目がみられる。第11図52の資料が、朝顔形円筒埴輪の口縁部破片と思われる。また、第13図80・89の底部破片を円筒埴輪の底部破片として説明したのであるが、断面の傾斜がやや急なことから判断して朝顔形円筒埴輪の底部破片の可能性もある。

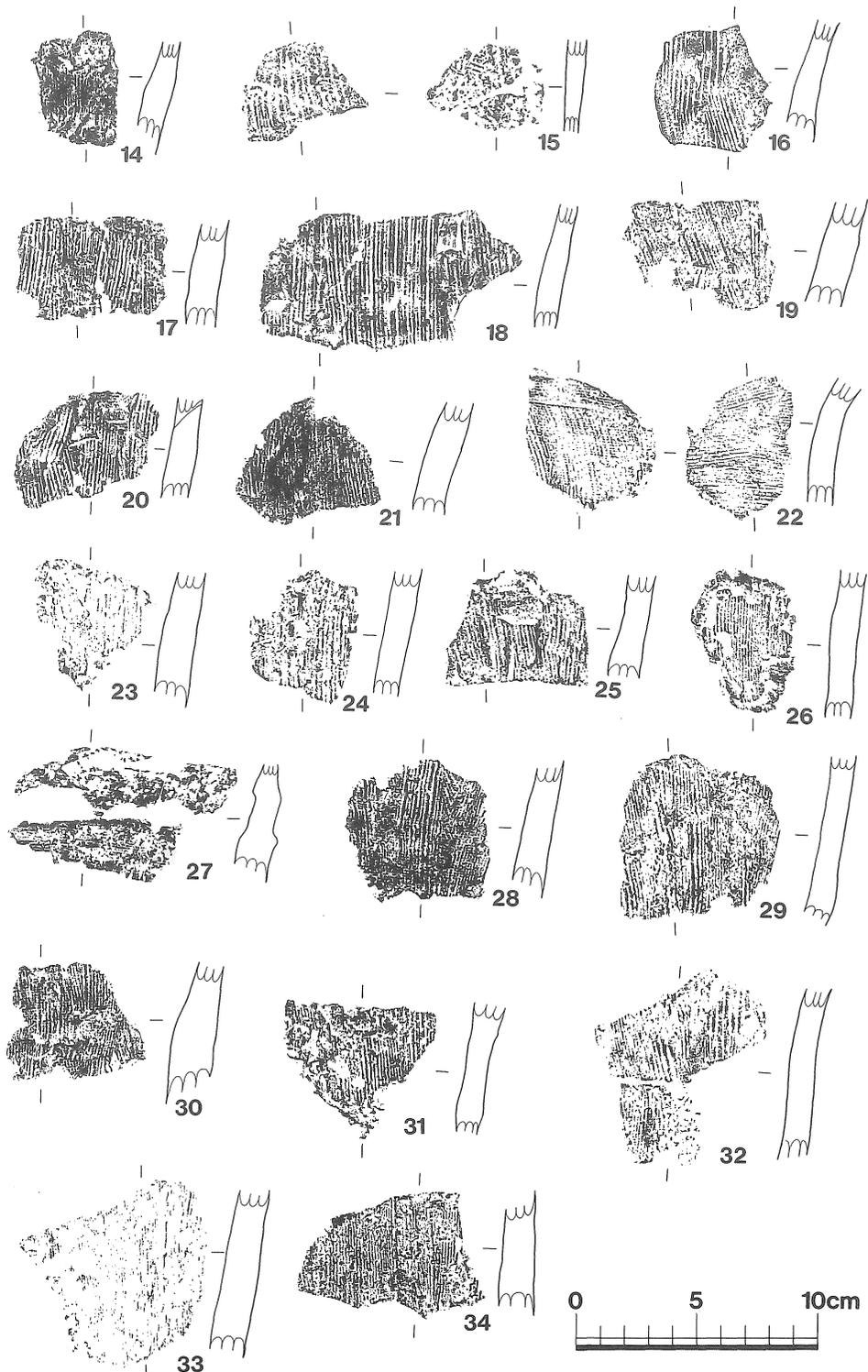
以上が、数少ない朝顔形円筒埴輪と云う資料の主要なものについてのすべてである。



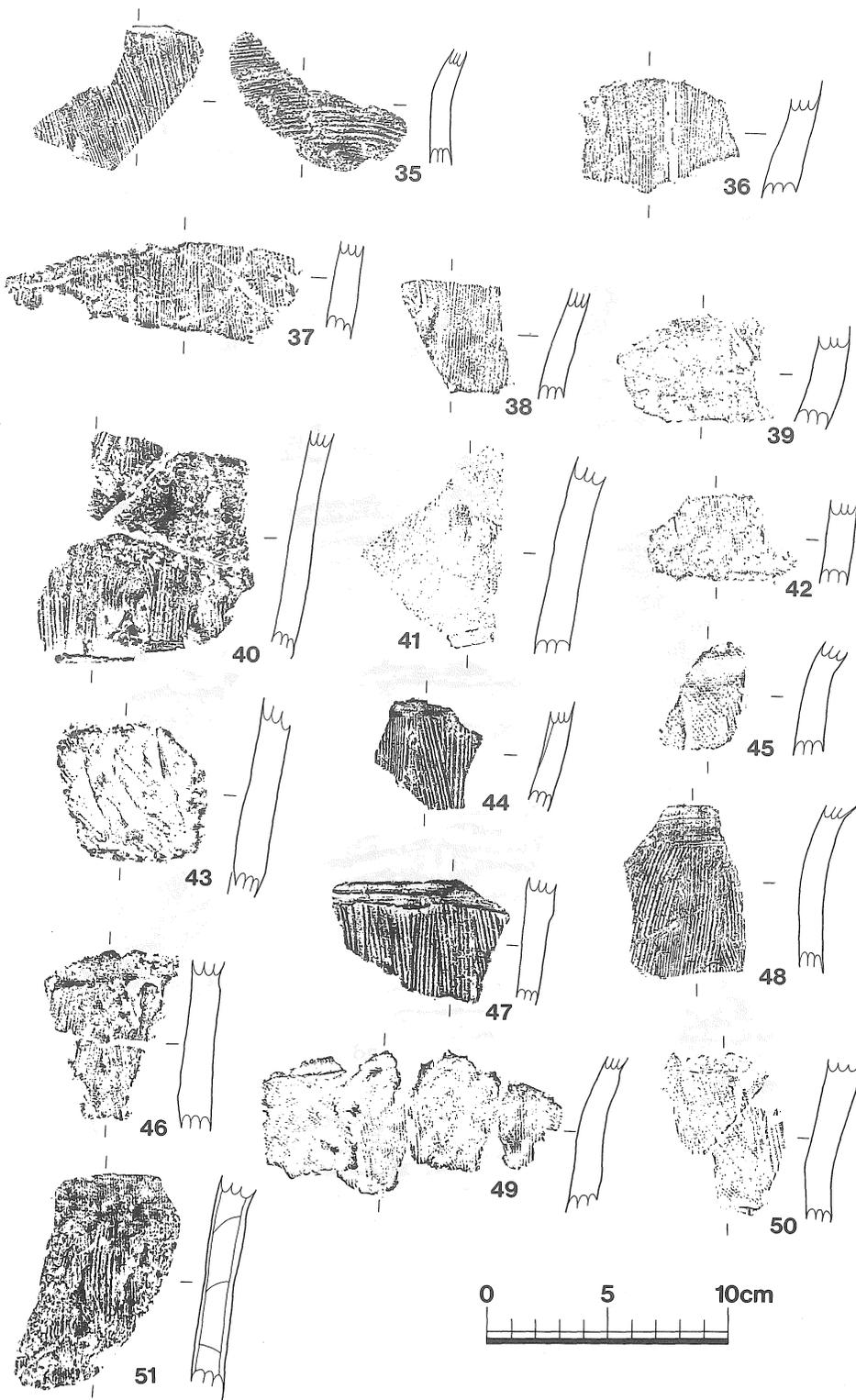
第7図 埴輪実測図1(円筒埴輪)



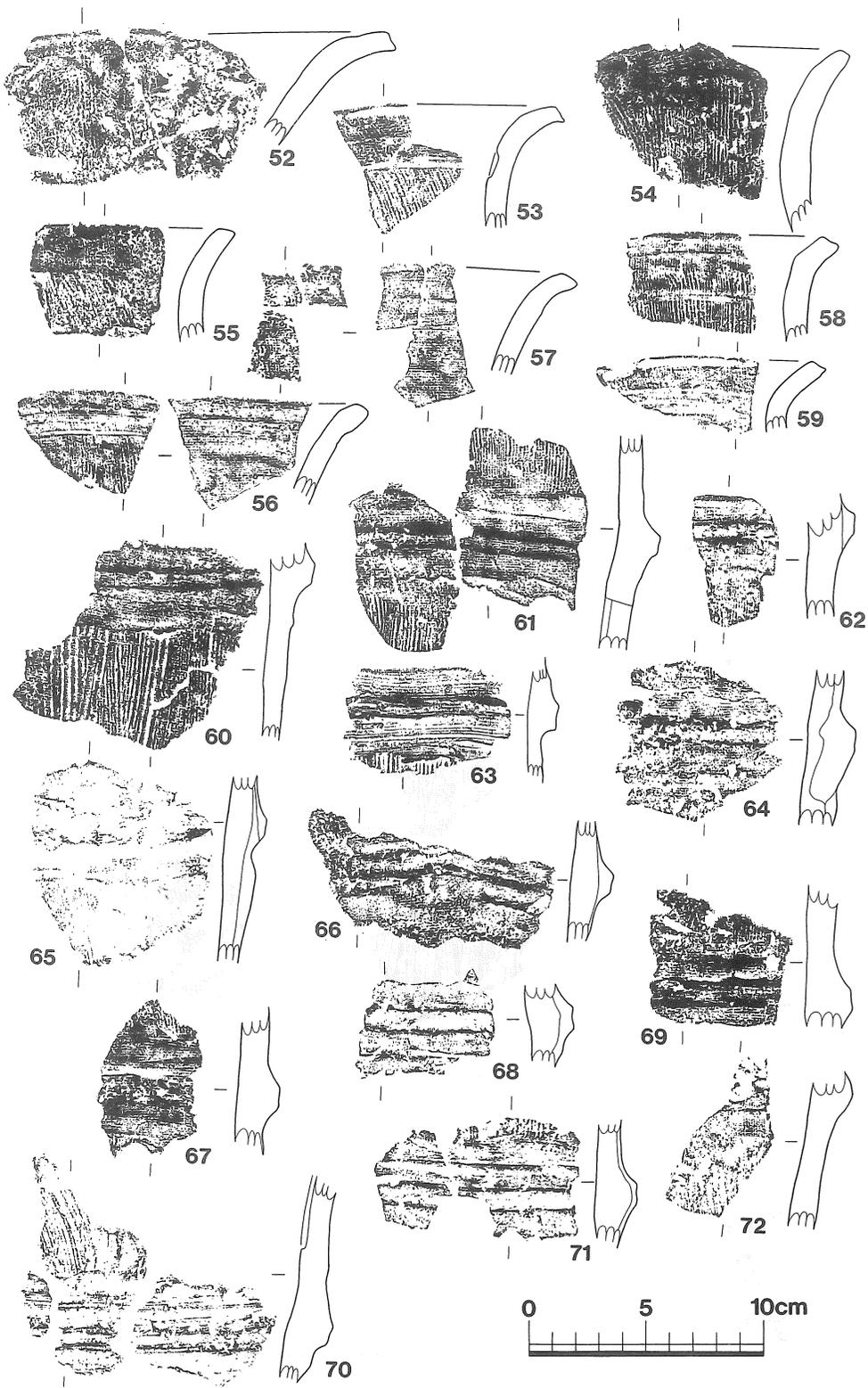
第8図 埴輪実測図2(円筒埴輪)



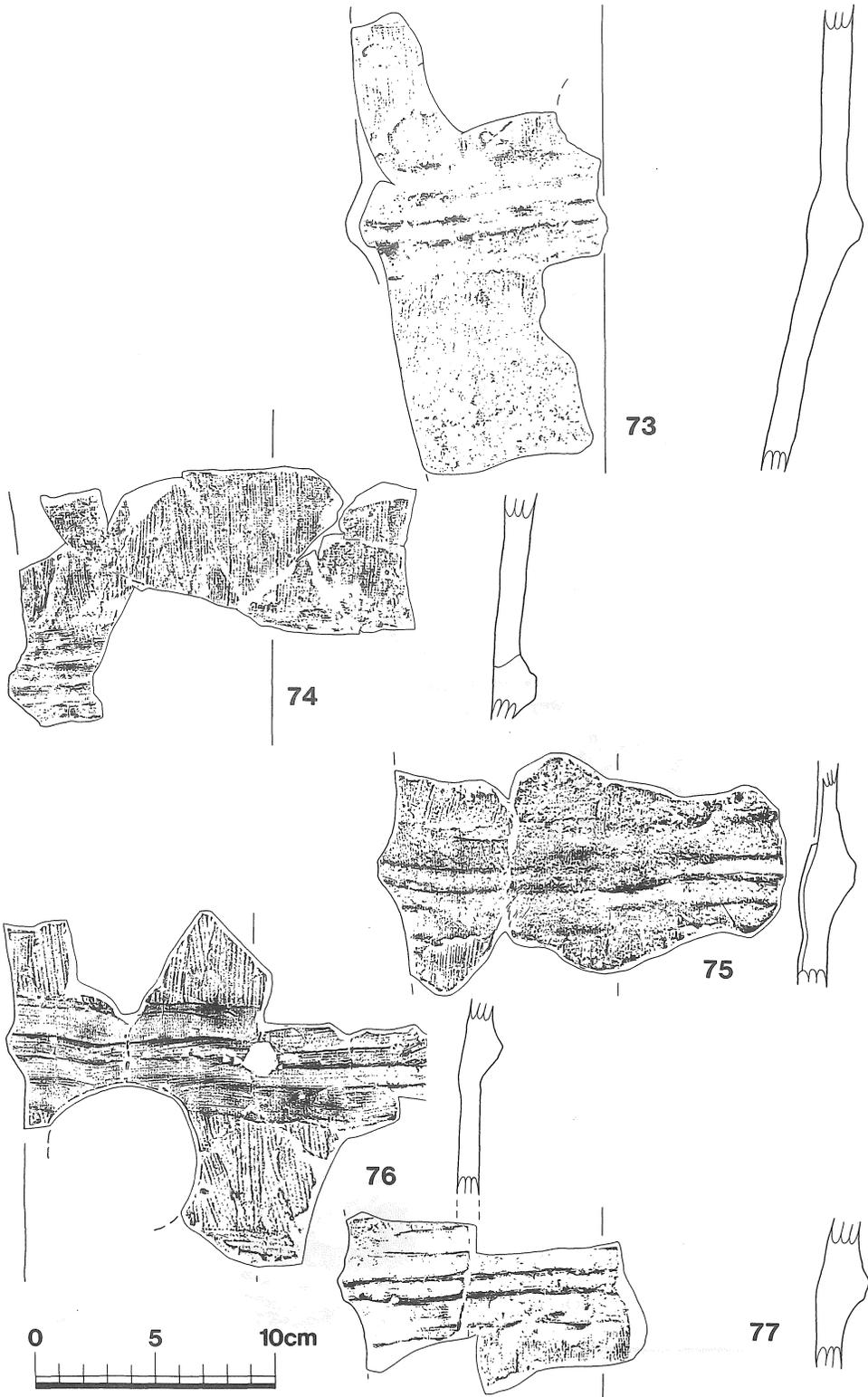
第9図 埴輪実測図3(円筒埴輪破片)



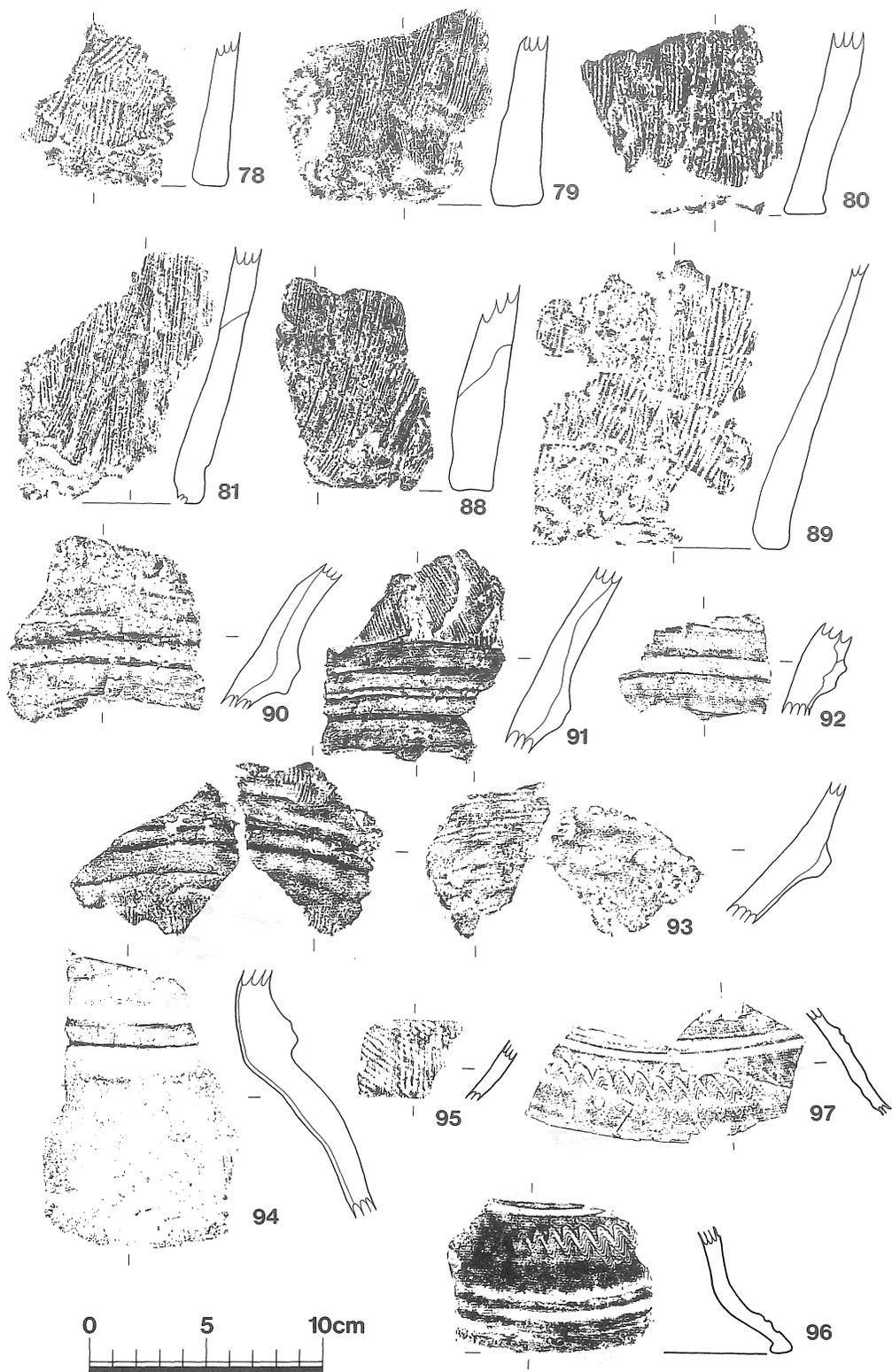
第10図 埴輪実測図4(円筒埴輪破片)



第11図 埴輪実測図5(円筒埴輪破片)



第12図 埴輪実測図6(円筒埴輪残欠)



第13図 埴輪実測図7(円筒埴輪78~81・88・89・朝顔形円筒埴輪90~94破片)及び
須恵器破片95~96実測図

○象形埴輪・器財埴輪

何れも破片であるが、象形埴輪と判断されるものは第14・15図及び第16図102～109に集成した。

このうち、象形埴輪としての本来の形状を指摘できる一つは、第16図の108・109である。鳥の頭・首(108)と胸(109)であって、胎土の様子や焼成などから本来同一個体と思われる。109資料の断面から、首を身の部分に差しこんで造りあげた工程を知ることができる。頭部に突出部が付き、顔の両側に頬肉状の貼付けがみられることから鶏かとも思われるが断定することはできない。頭から首の全高16.2センチである。

他に動物との関連の考えられるものとして第15図117は耳状の部分であるが、馬の埴輪にみられるものに近く、最大高8センチである。第16図102～107は6個の球状をした部分残欠であるが、最大のもの(107)の径4.6センチ、最少のもの(105)の径3.8センチで、6例共偏平な剥離部と横一文字状の刻みのみられる点が共通している。こうした部分の類例を求めるとすれば、飾り馬埴輪に付される馬鈴であろう。117と102～107の相関関係の有無については全く知ることができない。

第15図118は全長18センチ、同図119は全長12.4センチ、共に本体に挿入されていた嵌め込み部分を残す湾曲部の残欠である。本来の形状を知ることができないが、人物埴輪の腕の部分に近いと思われるが断定することはできない。

以上が、動物や人物と思われるものの部分、あるいは加飾部分と推定されるものである。

器財の一種と思われるものに、第14図120をあげることができ、最大高は18センチである。だ円状の円柱に袖状の付加物が左右に付くのが本来の形状のようで、その片側部分だけの残欠であるためにY字状の断面がみられるのではないかと思われる。こうした想定が許されるならば、靱の残欠という推定も可能である。袖状の部分の厚さ3センチ、上下14.8センチである。表面は平滑に整形されているが、数箇所に残された刷毛目が残っている。

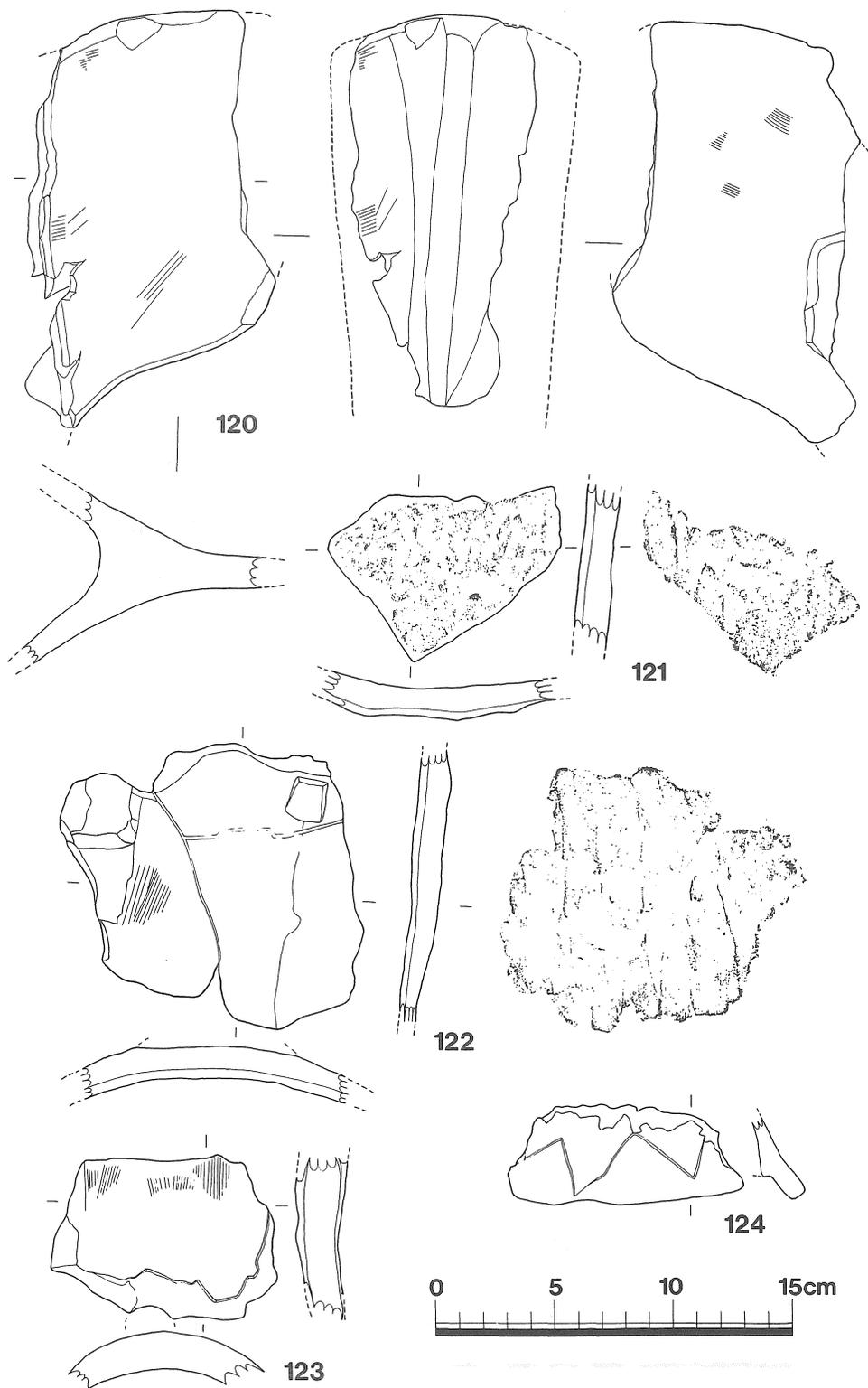
他の資料は、円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪ではない象形埴輪の残欠と思われるが、本来の形状を推定しえないものである。横断面がゆるく湾曲しているもの(第14図121～123、第15図113・114)と、平らなもの(第15図110～112)とがある。両類共に偏平な帯状の貼り付けがみられ、帯の上に点々と方形偏平な貼り付けのあるのが共通している。それら以外の資料(第14図124、第15図115・116)についても、本来の形状を知ることができない。以上が各種象形埴輪の観察結果であるが、その中には本来の形状を知りえないものを含めて数種類の変化がみられることが、寺の谷3号墳出土の象形埴輪群構成上の特徴ということ

ができると思われる。本古墳の位置する小笠町域では勿論、菊川流域に類似する埴輪群の伴なう古墳はまだ発見されていない。

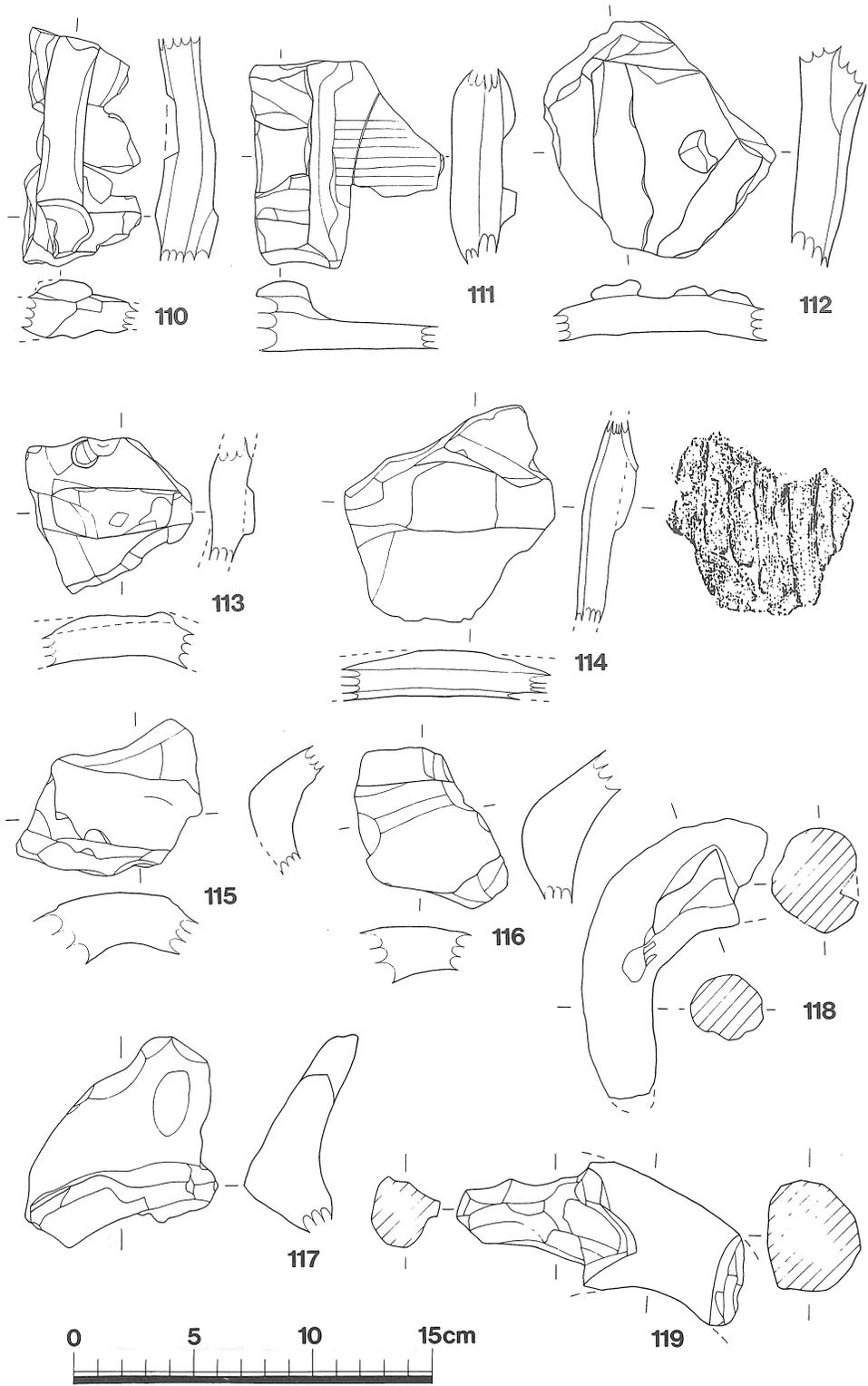
(3) 出土の須恵器について

発掘によって出土した須恵器は第13図95～97に示した3点であり、おそらく同一個体の資料とされる破片である。図示した3点のうち、96・97は接合しないが接近した部位の破片であろう。それぞれに櫛描き文が一条横走し、上下に二～三条の平行沈線がみられる。96の資料は表面の約半分の範囲や裾部及び内側にかけて自然釉の噴き出しているのがみられる。断面の状態では裾部内側に凸出して終わっているのがみられる。95の破片の外表面には叩き目がみられ、内面は平滑に整形されている。これらの破片の本来の器形は、太頸壺かとも思われるのであるが、一応器台として判断しておきたい。

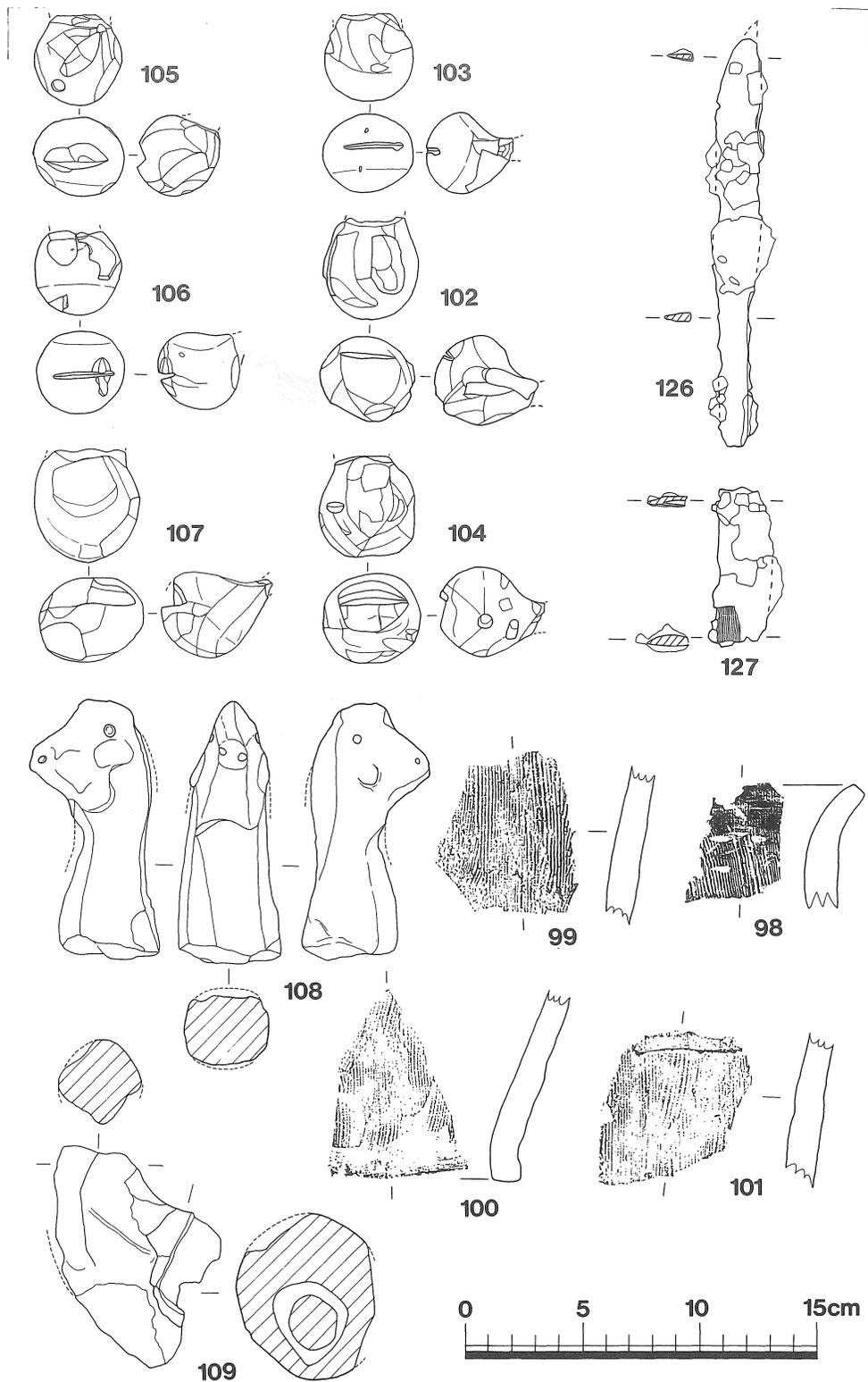
これらの資料が出土したのは、墳丘北西側4トレンチと北北西側の3トレンチとの中間の地点、出土層位としては表層直下の第2層暗褐色土層中である。出土地点に近い4トレンチ北壁の断面(第3図)にみられる暗褐色土層は、表土層の直下に位置し、内溝を埋める暗褐色土層と外溝を埋める灰褐色土層の両層を覆っている。外溝を埋める灰褐色土層が埴輪の包含層に相当することはすでに説明した。以上のような層位の状況から、説明した須恵器は埴輪の埋積期より後出の関係にあるということが出来る。



第14图 埴輪実測图 8(象形埴輪残欠)



第15图 埴輪実測图9(象形埴輪残欠)

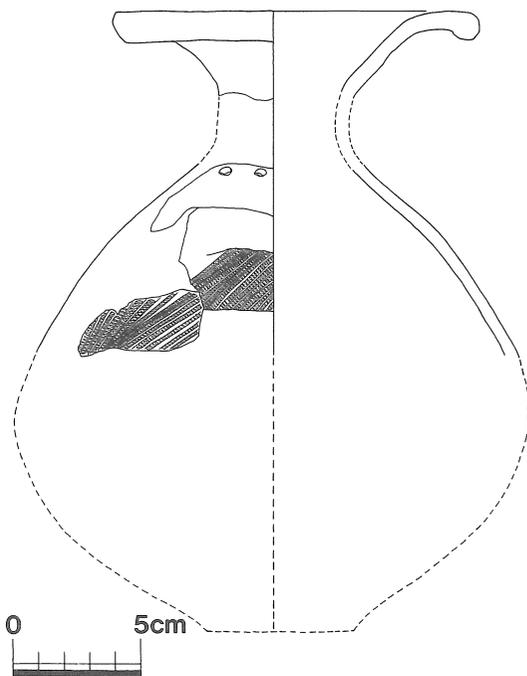


第16図 埴輪実測図10(象形埴輪残欠102~104・108・109)及び須恵質円筒埴輪破片(98~101)実測図・内部主体出土刀子(126)及び直刀残欠(127)実測図

(4) 出土の弥生土器について

発掘した弥生土器は第17図125(第3図版c)に図示した。土器の焼成は悪く、硬化剤を用いて辛うじて現状を保ちうる状態であった。胴部から底部にかけてを欠失し、現存部分の高さ13.4センチ、復元高で24.7センチ、口縁部最大径14.5センチ、器壁の厚さ6ミリ前後である。口縁部断面には折り返し口縁と称される特徴がみられ、頸と肩の境目には一対の円形貼付文がみられる。肩の下半には斜行縄文が施されているのがみられる。菊川流域において弥生後期前葉に位置づけられている土器で、従来菊川式土器と呼ばれた土器型式の一部に属する。

本資料の出土状況は、第6図に示した。発掘地点は墳頂部b・c区の内部主体直下のV字溝中で、同図d—e断面にV字溝中の出土レベルを示している。内部主体とV字溝との層位関係についてはすでに述べたので説明を省略する。



第17図 内部主体下部V字溝出土土器(125)実測図

5. 寺の谷3号墳の諸問題

以上に、寺の谷3号墳の発掘結果を概観してきた。

古墳そのもの問題としてではなく、弥生後期の土器を出土したV字溝の問題についてであるが、こうした溝状の遺構が単独に存在するということは先ず考えられないので、寺の谷3号墳の位置する台地上に弥生後期の遺跡——おそらく集落であろうが——伏在する可能性を充分予測することができる。その解明は今後に残された問題の一つである。

本古墳の発掘時の規模は、封土の高さを周溝外側の地表面から測っても1.8メートル東西の幅12メートル、南北の推定幅で11.4メートルであることを墳形の説明に述べた。併せて、墳形そのものが円墳と言えないことを述べているが、その根拠としての第一点は、-0.2、-0.5、-1、-1.5メートルの等高線の走向に直線状の部分ないしはゆるく弧を描く部分がみられること、それらの等高線に平行関係がみられること。また周溝内溝の内壁の走行にも、かなり直線的な走行を示しているのがみられること。

以上2点から判断して、寺の谷3号墳の墳形が、本来方墳であった可能性を考えることは困難な判断とは思われない。

墳丘をとりまく周溝には、さまざまな問題が含まれているのがみられた。

第一にその平面形であるが、削りとられてしまった墳丘南側部分について知ることはできないが、残存部からは次のようなことが言えるようである。墳丘の西側ではくの字なりに、東側では逆くの字なりに対向する状態で位置している。3トレンチの位置する幅3.8メートルの間は墳丘への通路であるかのように、周溝は途切れている。墳丘南側の周溝の状態について全く知ることができないのが残念であるが、周溝の一部に通路状の部分がみられたということは、きわめて貴重な知見と思われる。

周溝をめぐる第二の問題は、先に外溝・内溝と呼んで区別したような重複する現象が認められたことである。そして、周溝の調査結果において説明しているように、各トレンチの層位関係としてみられるとおり内溝が先に掘削され、外溝が内溝の一部を削って後に設けられたこと、即ち両周溝間に新旧関係のあることも否定できない事実である。しかも埴輪の残欠あるいは破片は、すべて外溝を埋めている暗(黒)褐色土層中(第3層)から、二次的に流れこんだ状態で出土していることは、第3図1・2・6・8の各トレンチ断面や、第4・5図版の出土状況にみられるとおりである。これらの事実から、外溝が墳丘に樹立された埴輪が落ちこむ前後の時期に機能していた事実は否定できないのであるが、内溝をいかに理解するかが問題として残る。付言するならば、すでに説明しているように、墳頂

部からV字溝の深さまでを掘り下げる過程において、確認された内部主体は一例にとどまる。

以上の諸事実を勘案するならば、内溝は墳丘築成当初に施設され一次的周溝と解釈されるように思われはするが、なぜ周溝の造りなおしが行われたかを説明する積極的な手がかりを得ることはできなかった。

周溝についての第三の問題として、墳丘西側部分の周溝が4トレンチの位置から西南方向に折り返し状に延びているのをあげることができる。4トレンチ南壁断面(第3図)にみられるように、外溝から延長部分が延びているのがわかる。延長部分を掘り進める時間の余裕はなかったのであるが、地形は溝の延びていく方向に向かって低くなっており、外溝に排水の機能を備えた溝が続いていると判断しておきたい。寺の谷3号墳が台地上に位置することはすでに述べたが、古墳とその周辺では表土層が薄く、層厚10センチ弱から60センチ弱で褐色粘土層(第7層)・淡褐色粘土層(第8層)に達するために、台地上とはいえ排水の良い場所ではないのがわかる。周溝の外溝・内溝共、6トレンチ以外ではその粘土層中に掘られているのであるから、或いは周溝からの排水のために水ぬき溝のような付帯施設を必要としたのかとも考えられる。

以上が周溝に関する諸問題である。墳丘に続いて周溝の問題を検討してきたのであるが、外溝中より検出されたかなりの量の埴輪の原位置がどこに求められるのかを説明する手がかりは、墳丘・墳裾において確認することはできなかった。

内部主体の規模や状態については、すでに説明している。棺内は後世の攪乱などを受けていないかのように整然としているのであるが、副葬遺物の極端な貧弱さと刀子と直刀の残欠だけが出土していることなどから、後世に攪乱を受けていることは否定できないようである。棺の構造についても、棺の幅が西に向かってわずかにせばまっていたということ以上を知ることはできない。

これと類似する内部主体は、小笠山西北の山麓に位置していた、地藏ヶ谷1号墳(参考文献2))に見ることができる。地藏ヶ谷古墳群では、封土を伴う古墳3基によって構成されているが、そのうちの1号墳は東西方向に走る台地のせまい稜線に位置し、墳丘の「基底長径」12.5メートル、短径10.2メートルで「楕円形を呈し」墳丘の高さは1メートルの古墳と報告されている。内部主体は「第一粘土槨」・「第二粘土槨」の2例が検出され、両主体はほぼ北東～南西方向に長軸を向けて約2メートルの間隔を置いて平行している。粘土槨は小礫の混る灰白色粘土で作られているが、第一粘土槨の規模は内法で全長2.56メートル、幅は西南端で45センチ、中央で46センチ、東北端で28センチを測り、底部は平坦につ

くられているが両端はゆるやかな曲面をえがいて小口と両側に立ち上がっているため全体としては船底形に見える。第二粘土槨の内法は、全長2.35メートル、幅は東北端で40センチ、中央で45センチ、西南端で45センチ、壁面の高さは約30センチを測るが、槨上部を覆う粘土は見られない。そして、報告者は第二粘土槨を「総体的に狭長な方形を呈し」「棺の形態は箱形に近い」と判断している。

地蔵ヶ谷古墳群1号墳第二粘土槨の構造が、傾向的に粘土ブロックを置き並べているように見られるのに対して、寺の谷3号墳の内部主体の構造は粘土を貼っているように見える違いはあるものの、粘土構造の形態としてはかなり良く類似しているといえよう。地蔵ヶ谷古墳群1号墳の古さを、報告者は古墳時代後期前葉と判断している。

寺の谷3号墳の周溝中の出土遺物として、変化に富んだ埴輪があることは説明した。器高を知ることのできる円筒埴輪であっても全体の高さは45センチであり、埴輪としては小形のものである。全形が小形であるという点は、朝顔形円筒埴輪や他の象形埴輪についても共通する点であって、埴輪としては終末期のものということは許されるであろう。本古墳の西、約7キロメートルの地点では大東町星川窯跡(参考文献(6))が発掘されており、古墳時代後期の埴輪を出土しているが本古墳出土の埴輪に類似するものは見られないようである。

菊川流域の小笠町をはじめ菊川町・大東町において、埴輪の伴う古墳を静岡県教育委員会発行『静岡県文化財地名表Ⅱ』で見ると菊川町に2基(高田原古墳群1号墳、鹿島古墳)、大東町1基(惣兵衛山古墳)、小笠町1基(上平川大塚2号墳)の4基があげられている。更に本古墳の資料を加えても、菊川流域全体で埴輪を持つ古墳はわずか5基が知られるにとどまるのである。

他の出土遺物に、器台形須恵器破片と判断される資料のあることを説明した。その出土層位は、周溝の外溝を埋めている暗(黒)褐色土層(第3層)——埴輪の包含層——と表土層にはさまれた黒褐色土層(1b層)から検出されている。須恵器器台の類品は、袋井市大門大塚古墳(参考文献(8))・磐田市甕塚古墳に見ることができる。県下須恵器編年の一研究としての川江編年(参考文献(5))では、これらの資料をⅡ期後半に比定し、さらに陶邑のTK10号窯の製品(参考文献(4))に対比している。本古墳出土の器台と判断した須恵器資料も、これらの類似資料とほぼ等しい時期ないしその直後に比定しうると思われる。その資料が出土した直下の黒褐色土層(第3層)中に包含されていた埴輪類が、本古墳出土の須恵器器台を指標とする時期を降らないものであることは明白であろう。

本古墳の内部主体に副葬された遺物の全体について知ることができなかったのは残念で

あるが、袋井市地蔵ヶ谷古墳群の内容をはじめ諸類似資料との比較から、本古墳を古墳時代後期前葉に営まれたものとする事は許されよう。径が10メートルをこえる規模の封土で、粘土構造の内部主体をもつ古墳は、南遠地方東域の後期前葉期にみられる古墳の一形態といえるようである。後期前葉期には、すでに袋井市大門大塚古墳のように、「楕円形礫を小口積みした小石室」のような従来見られなかったような内部主体をもつ古墳の存在も知られている。そのような古墳と比較するならば、埴輪をもち粘土構造を内部主体とする本古墳の性格は、菊川流域において伝統的性格の強い一在地首長の墳墓としてとらえることが許されるように思われる。

以上のような考察を結論に代えて、寺の谷3号墳発掘調査結果の報告の責に代えたい。

参 考 文 献

- (1) 後藤守一 1922年 「大塚古墳調査報告」 『考古学雑誌』第十二卷第九号
- (2) 平野和男・山村宏・大谷純一 1965年 「8 地蔵ヶ谷古墳群及び横穴」
静岡県教育委員会 『静岡県文化財調査報告書第6集 東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (3) 内藤 晃 1966年 「Ⅲ 古墳文化の地域的特色7 東海」
近藤義郎・藤沢長治編 『日本の考古学Ⅳ 古墳時代(上)』河出書房新社
- (4) 田辺昭三 1966年 『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古クラブ
- (5) 川江秀孝 1979年 「2 静岡県下の須恵器について」
静岡県考古学会 『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』
- (6) 鈴木敏則 1982年 「星川古窯跡出土遺物」
静岡県考古学会 『静岡県考古学研究13』
- (7) 足立順司 1983年 「第二編 原始時代の袋井 第四章 古墳時代の袋井市域」
袋井市史編纂委員会 『袋井市史・通史編』袋井市役所
- (8) 吉岡伸夫 1987年 「第3章 古墳、第7章 まとめ」
静岡県袋井市教育委員会 『大門大塚古墳—昭和61年度基礎資料収集調査報告書—』
- (9) 中嶋郁夫 1990年 「2 東部(静岡)」
石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 『古墳時代の研究11 地域の古墳Ⅱ 東日本』雄山閣

版 图



a

東側から墳丘を望む



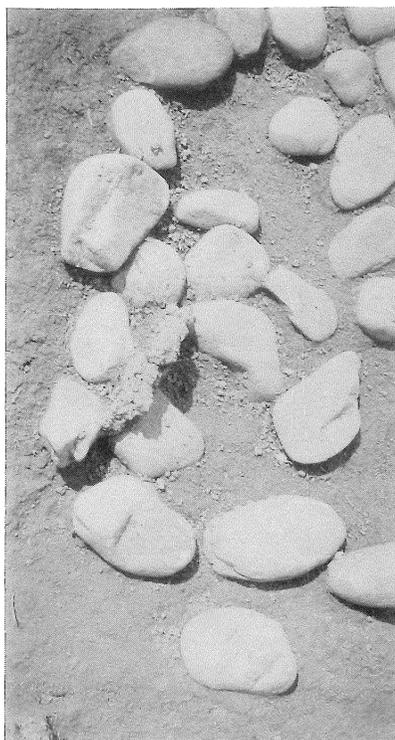
b

西側から墳丘を望む



c

南側からの墳丘近景



a 内部主体内での刀子出土状況



b 内部主体全景（東側より）



c 内部主体東端の状況



a

内部主体下のV字溝全景



b

内部主体下V字溝での弥生土器出土状況



c

内部主体下V字溝出土の弥生土器(125)



a 周溝と埴輪破片出土状況 (6トレンチ北西側、南東より)



b 周溝内の埴輪破片出土状況 (4トレンチ北東側、南東より)



c 周溝と埴輪破片出土状況 (2トレンチ北西側、南東より)



a

周溝内の埴輪破片出土状況



b

周溝内の埴輪破片出土状況

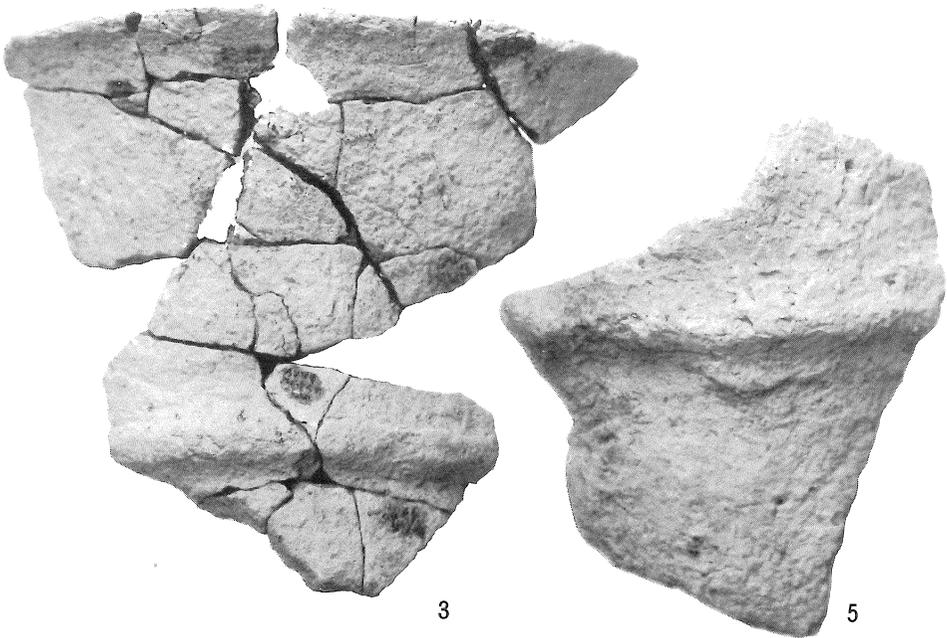


c

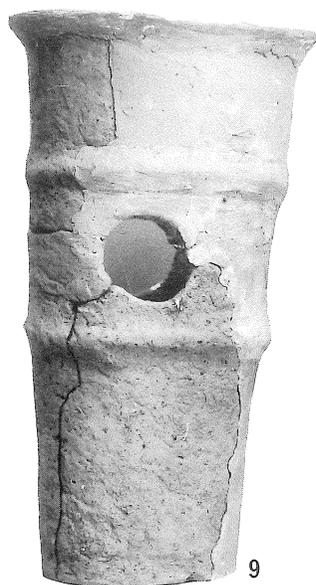
周溝内の埴輪破片出土状況



a 円筒埴輪口縁部破片



b 円筒埴輪口縁部及び胴部破片



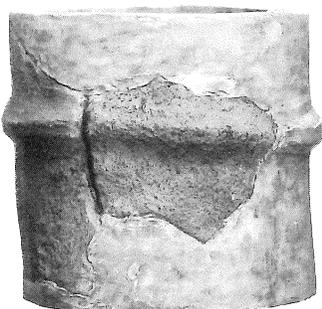
9

a



4

円筒埴輪



7

b



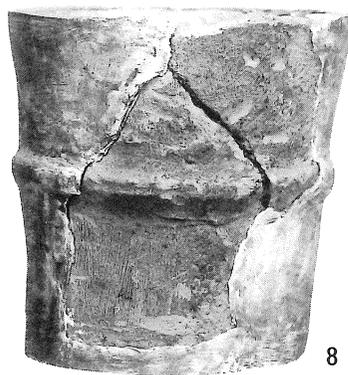
2

円筒埴輪口縁部(2)及び胴部(7)残欠



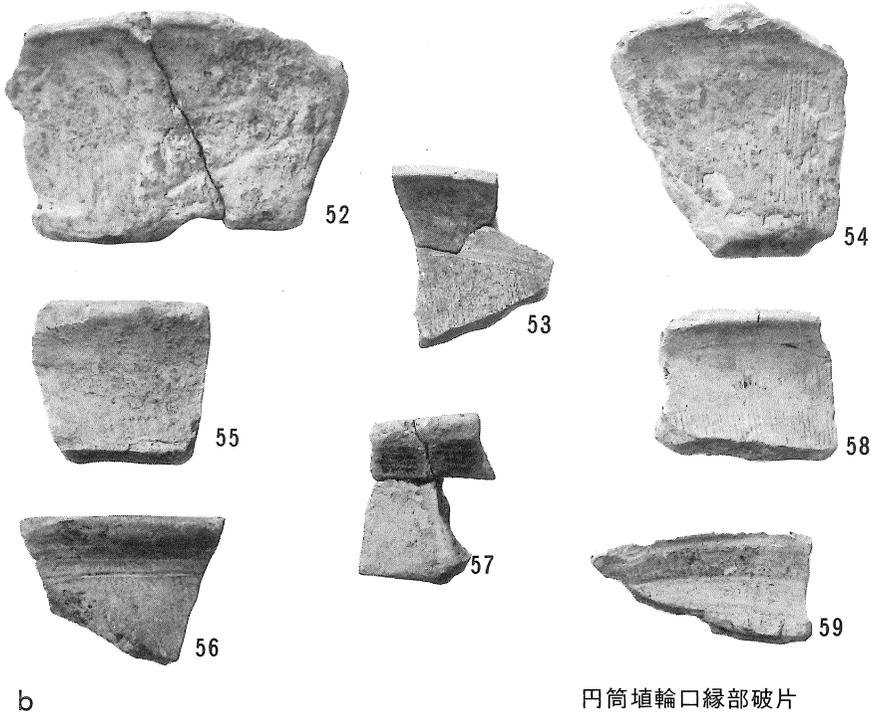
6

c



8

円筒埴輪胴部残欠

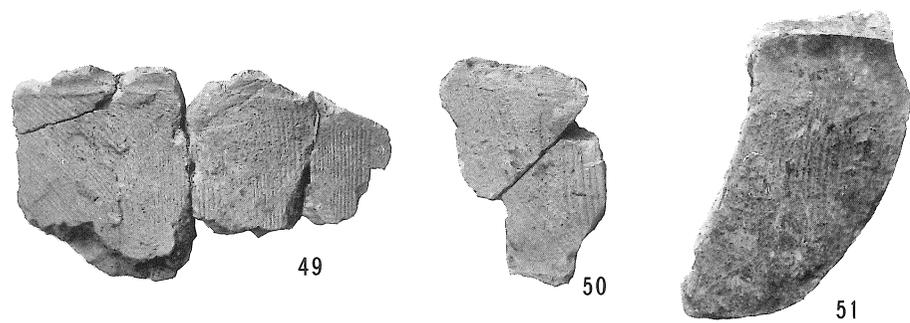
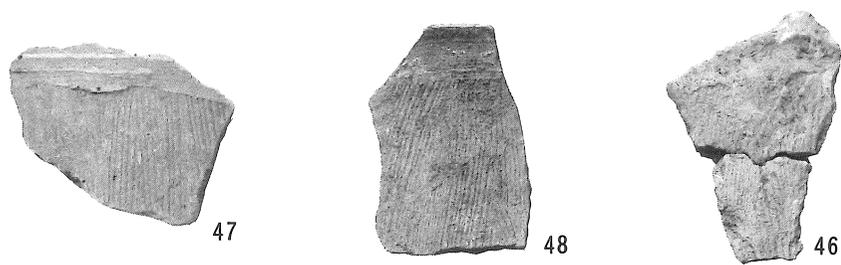


第9図版



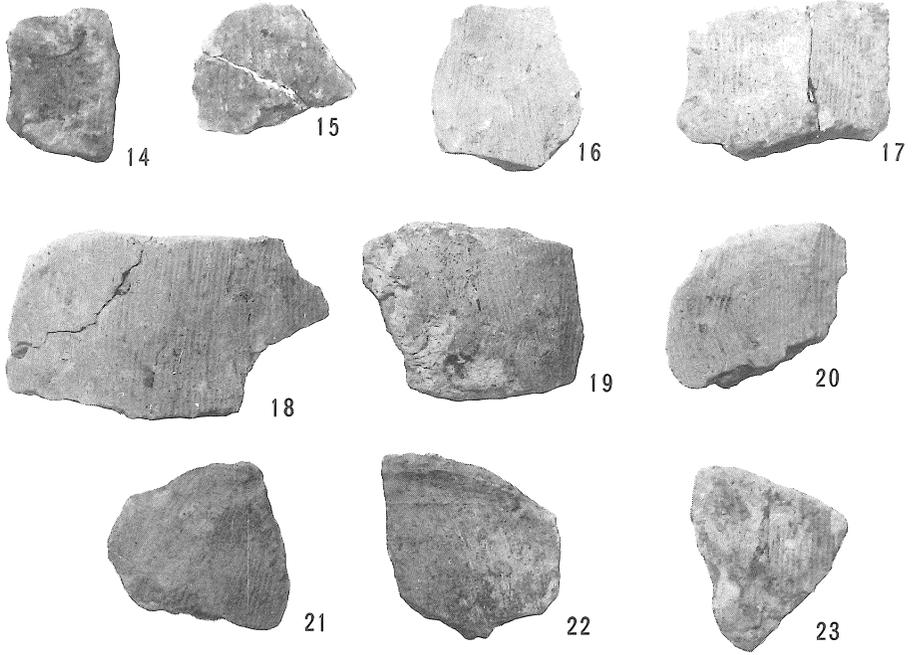
a

円筒埴輪破片



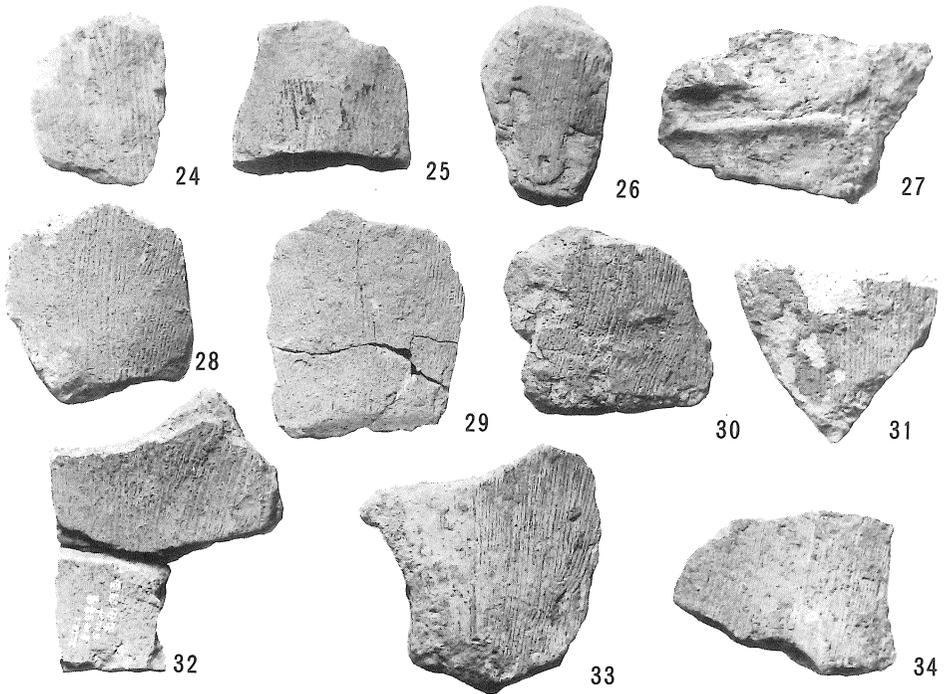
b

円筒埴輪破片



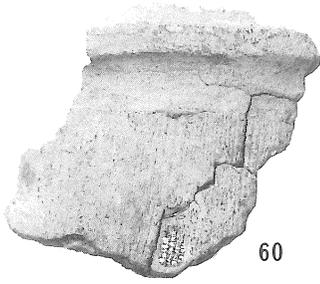
a

円筒埴輪破片

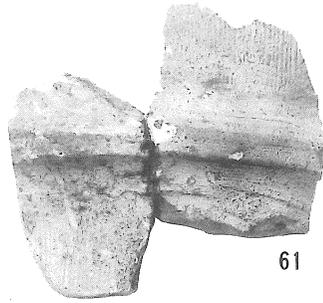


b

円筒埴輪破片



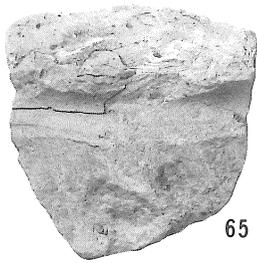
60



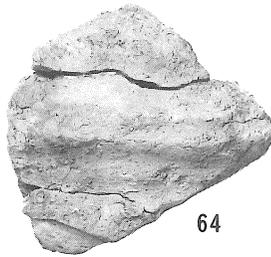
61



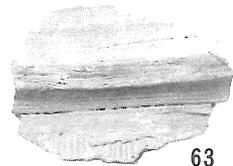
62



65



64



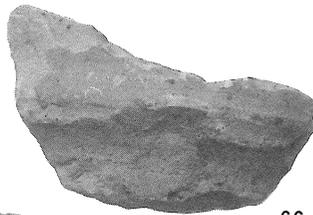
63

a

円筒埴輪破片



67



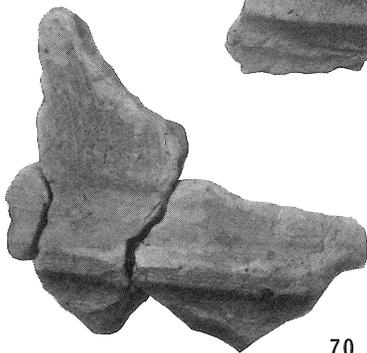
66



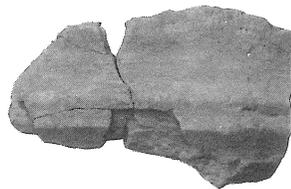
69



68



70



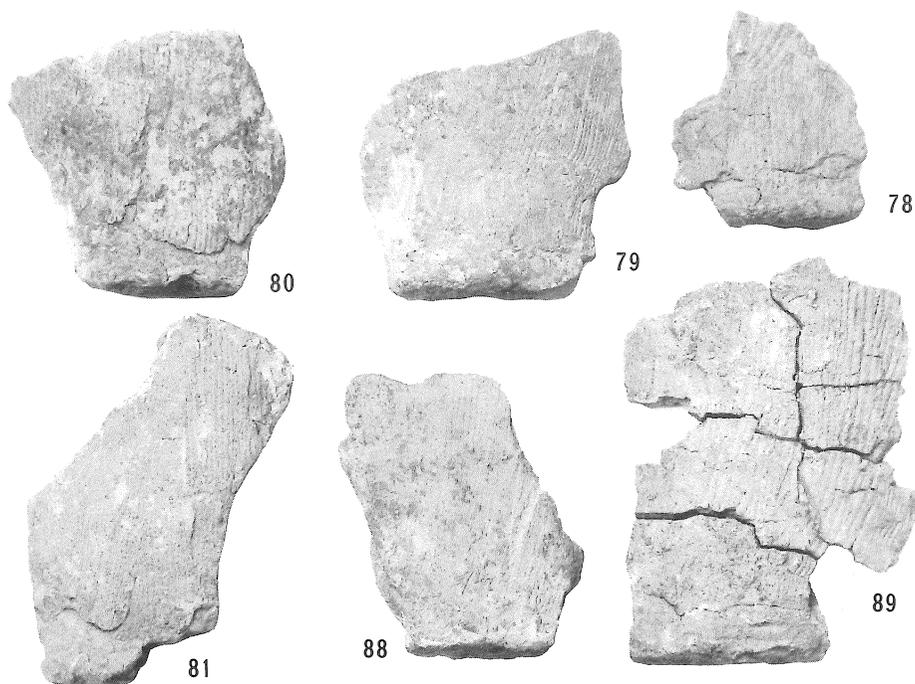
71



72

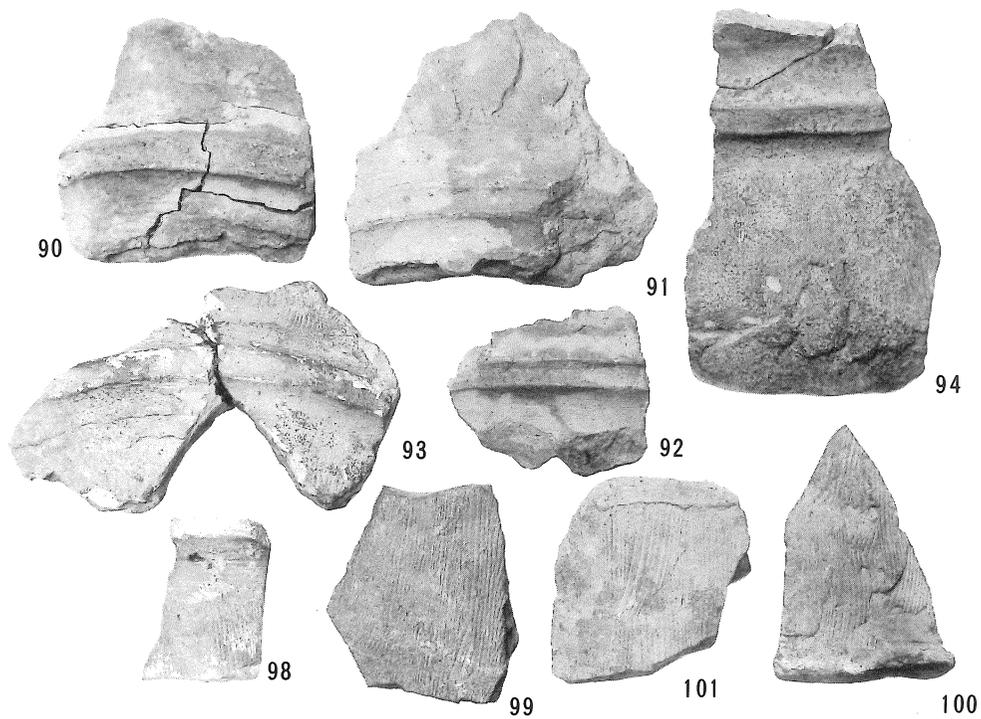
b

円筒埴輪破片



a

円筒埴輪底部破片



b

朝顔形円筒埴輪(90~94)及び須恵質円筒埴輪(98~101)破片



75



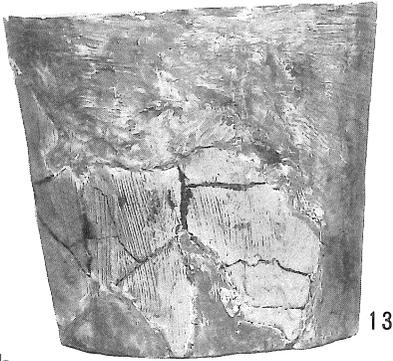
73



74

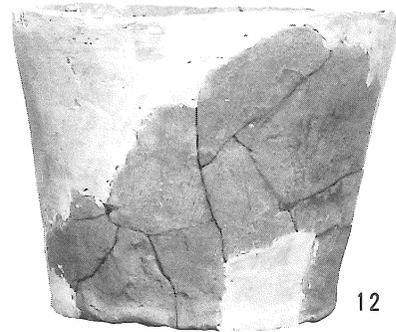
a

円筒埴輪胴部残欠



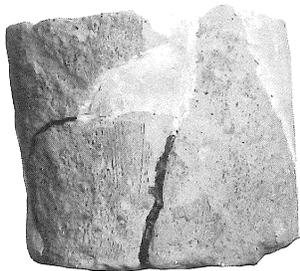
13

b



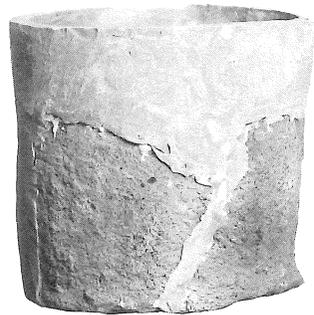
12

円筒埴輪底部残欠



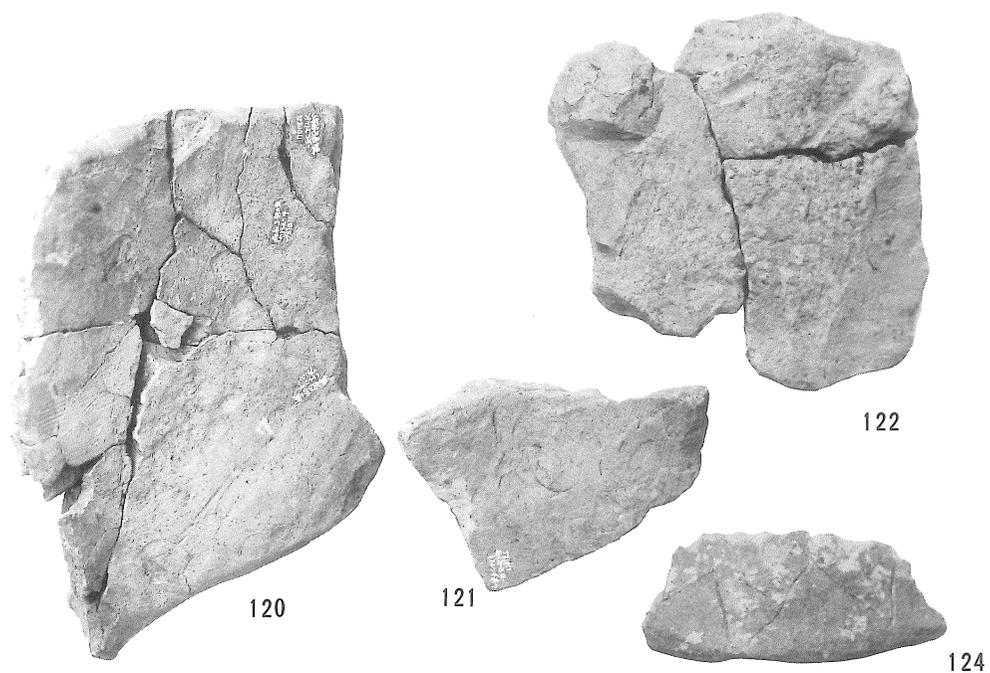
11

c



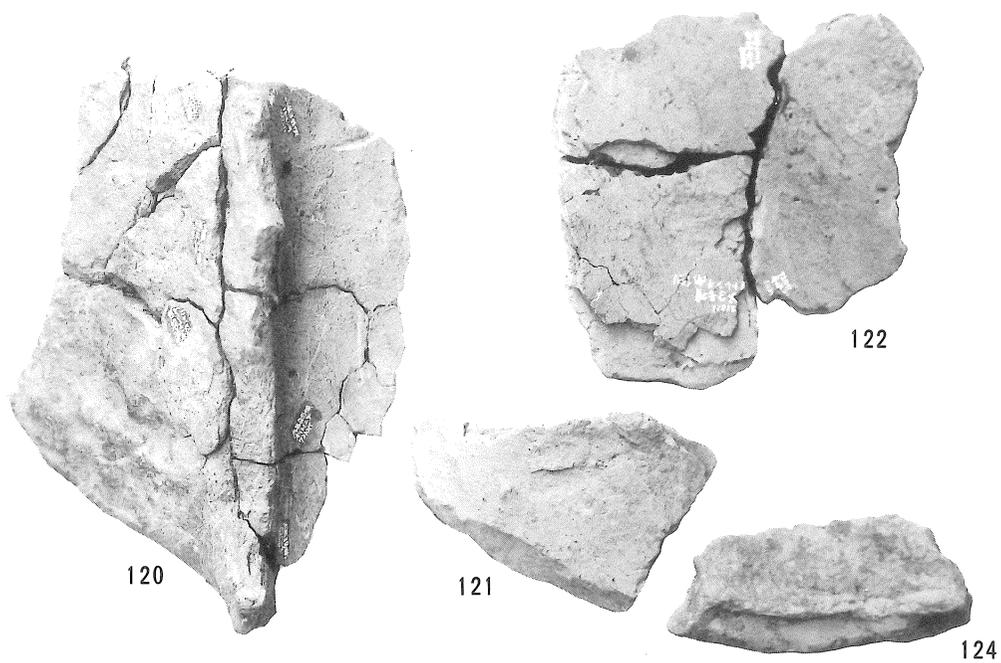
10

円筒埴輪底部残欠



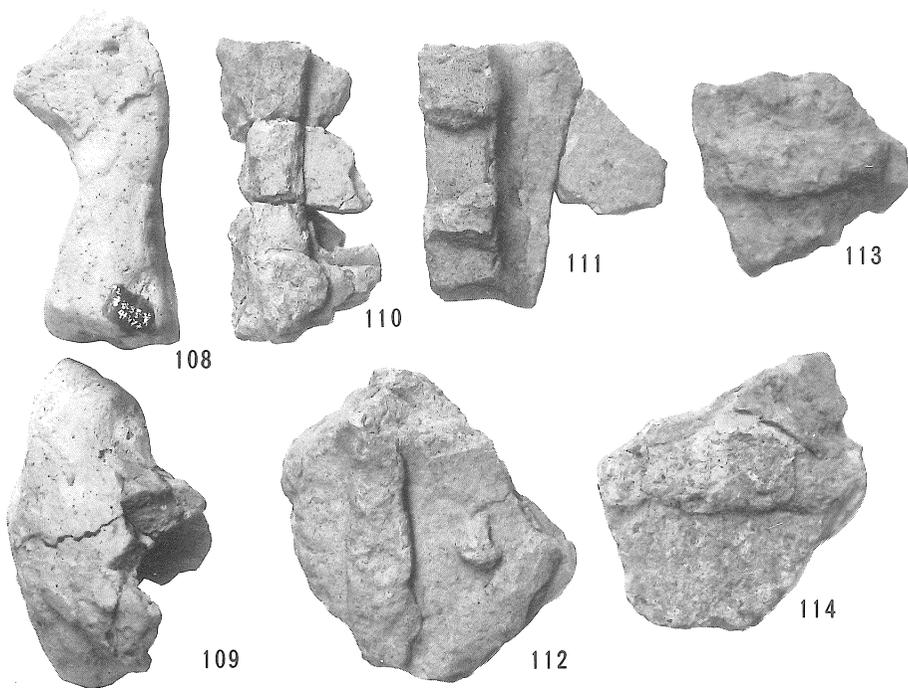
a

象形埴輪殘欠 (a面)



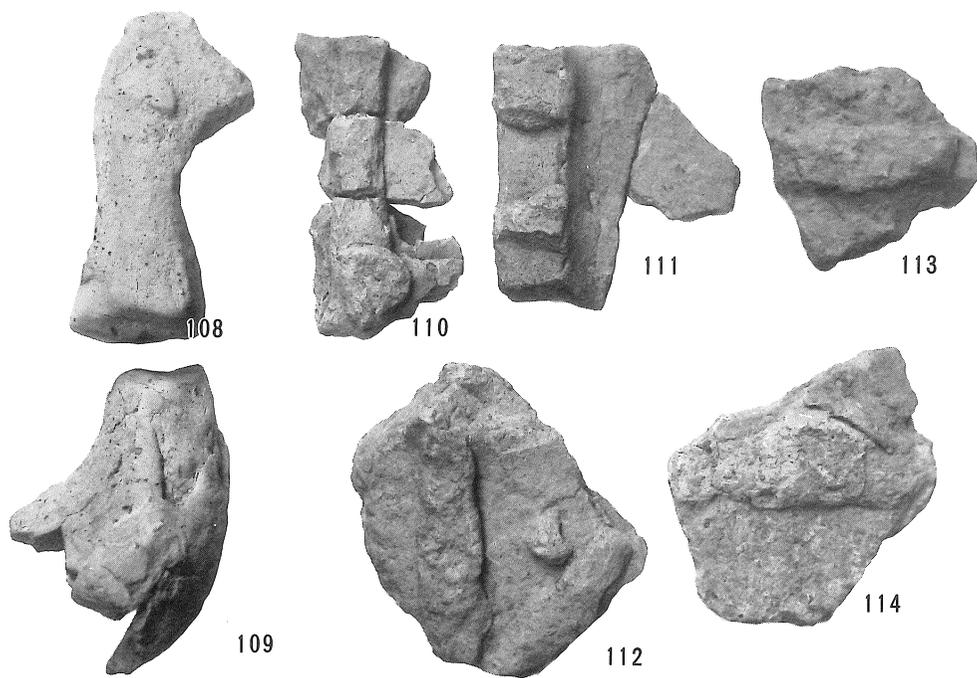
b

象形埴輪殘欠 (b面)



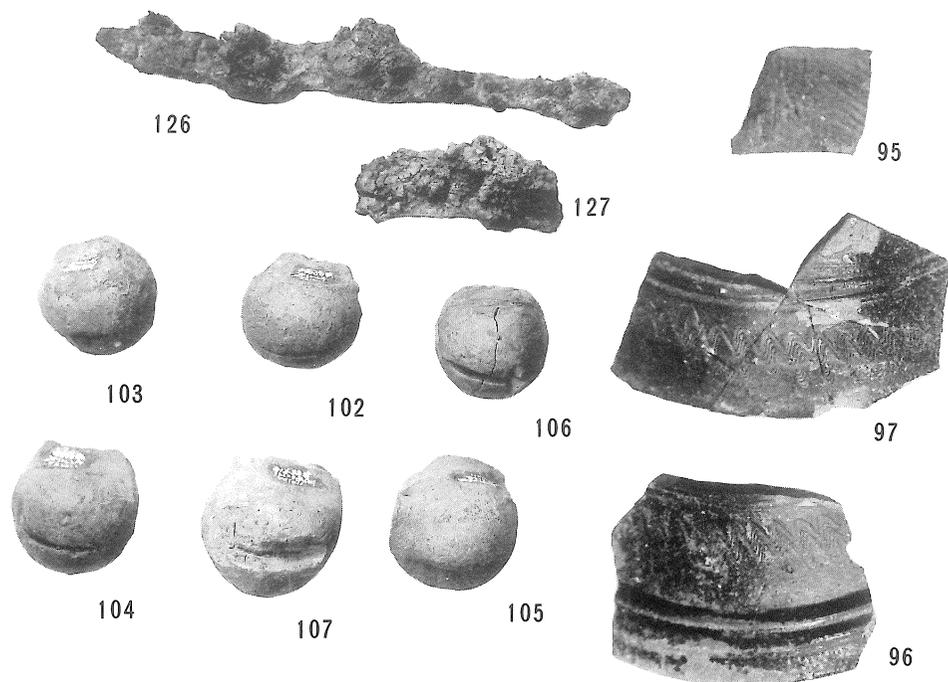
a

象形埴輪殘欠 (a面)



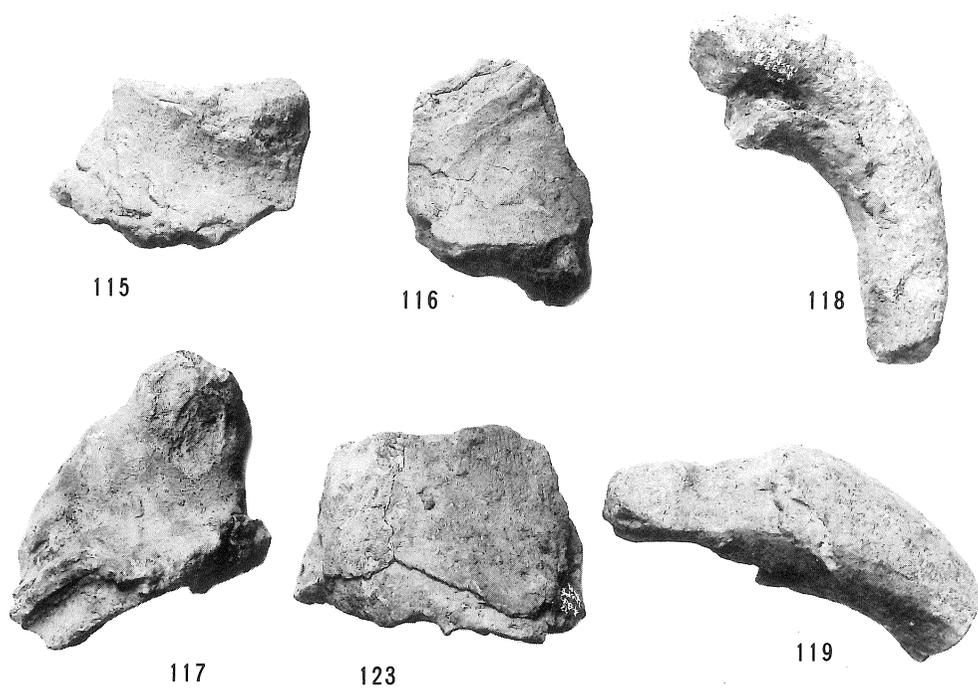
b

象形埴輪殘欠 (108·109 b面)



a

内部主体出土刀子(126)及び直刀残欠(127)、
象形埴輪残欠(102~107)、須恵器破片(95~97)



b

象形埴輪残欠

寺の谷 3 号墳発掘調査報告書

発行年月日 1991 年 3 月 30 日

発行 小笠町教育委員会 ©

〒 437-15

静岡県小笠郡小笠町下平川 1 3 6 8

印刷 松 本 印 刷